
SAVE

童竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SAVE

【Nコード】

N6289M

【作者名】

童竜

【あらすじ】

二つの人種が交じりあう二ホンで戦争が起きた

起こった理由は分からない・・・

しかし、十年の間

その戦争を止めようと影で準備をしてきた者達が動き出す

序章

ニホンには二つの人種が存在する

一つは機械文化を進めている人間

もう一つは昔からの伝統を守り、魔法を操る悪魔

相対する二つは交じりあい共存していた

しかし

何が起こったのか

十年前、人間と悪魔との間に亀裂が入った

力はほぼ互角だったが

悪魔側にある種族が出現したため

人間はトウキョウと呼ばれる土地に小さな町をつくり、町を防壁で囲った

悪魔がどの場所では生活しているかは誰も知らない

ただ一つ言える事は

トウキョウの外は、ほぼ無限の砂漠だということだけだ

第一章

トウキョウの防壁の上

そこに青白い髪をなびかせ歌う影があった

彼女は何かに気がつくように砂漠を睨み付けながら立ち上がった

「アイツらは馬鹿か・・・」

睨み付ける砂漠の地平線に土煙をあげながらトウキョウに向かい走る車があった

防壁にいる門番も彼女に遅れて気付くように部屋から出てくる

「こりやまずいな・・・」

「私が行って来る。」

「リユリこの距離・・・まあ大丈夫か、気を付けるよ」

リユリはノースリーブのロングパーカーを門番に渡すと「任せろ」と少し笑って階段を降りていかに防壁から飛び降り砂の上に降り、下に装備されていたエンジンの付いたスノーボードの様な物に乗って土煙の方へ向かっていった

「もう、あんな所まで行つたよ・・・。はえーなあ」

「マモルさん、リユリはいる？」

門番の名前を呼んだのは
高校生くらいの女の子だった

「おお、アラカ。さっき・・・多分カズマ達だろうな、車が追われているから助けにいったよ」

「待って！リユリは確か武器持っていないよ！！二年前のあの時刀無くしたって言うてたし！」

アラカにそう言われ

マモルはリユリが走っていった方向を見て黙った

「・・・まずいな・・・」

第一章？

カズマはアクセルを全開にして悪魔の放った《蟲》から必死に逃げていた。

「ヤバいつすよ！カズマさん！！」

助手席に座るジュンが泣きそうになりながらカズマにすがりつく

「うつせーよ！！こっちだって必死なんだ！！」

あのおそ者だけには見られたくないな・・・

「人間・・・そんな鉄屑で私から逃げると思っているか・・・？拳銃と言う奴ならまだしも、充電が切れているようだな・・・」

蟲が喋りだし驚きながらもカズマは前をずっと見ていた。

「カズマさあん（泣）」

「・・・クッソ！」

車を数十メートル進めると人が立っていた
片手には《サンドボード》を持っている

リユリだ

「アイツ・・・！？」

カズマが呟いた瞬間

微笑を浮かべたりユリは人間とは思えない脚力で跳ぶと、ボンネットの上に着陸して瞬間的にサンドボードをジユンに渡しながら呟いた

「助けに来てやったぞ。」

そのまま、ボンネットを蹴って蟲の方へ跳んでいく

「いつもながら、なんちゅう脚力なんだアイツは!!」

ジユンがサンドボードを抱えながら叫んだ

カズマはリユリを睨み付けると思い出したようににやけた

アイツは二年前、自分の武器を無くしている・・・リユリ、お前には武器なんて何もない。足止め役にでもなるために・・・

そう、思い出したカズマはにやけながらリユリの方を見た

その瞬間、カズマの口が魚の様に開く

リユリは音叉の様なクナイを取り出すと

蟲の脳天に突き立てていた

蟲は後ろに仰け反るとそのまま倒れ、体勢を整えようとするが目の前に黒い返り血を浴びた白髪の女が立っている

「この私が・・・この私が人間なんぞに・・・!？」

その瞬間、風が吹き

女の右目にかかっている長い前髪が揺らぐ

「お前・・・まさか・・・」

その言葉を放ったとき

顔の真ん中に熱いモノを感じ、目の前が真っ暗になった

返り血を浴びたまま、呆気にとられ車を止めているカズマ達と合流すると

ジyunからサンドボードを奪い取る

「カズマ、お前・・・」

「何だよ、よそ者！」

「何故、得意の銃を使わなかった。まさか、家に忘れて・・・」

カズマは顔を真っ赤にすると怒った口調で言った

「そっ・・・そんなんじゃないよ！！お前だけで十分だと・・・」

リユリはその言葉を聞いて冷たい目をした

「まあ、良い。お前ら歩いてトウキョウまで来いよ。」

「何でだよ!!」

「車が壊れてるからだ。」

リユリは言葉を吐き捨てるとサンドボードで先にトウキョウまで戻った

第一章？

トウキョウの食堂でカズマとジュンは汗だくになってうなだれていた。

砂漠から十時間かけて歩いてきたのだ

「はい、水！アンタ達本当に馬鹿だよ、武器を忘れて砂漠に出るなんてさ。死に行つたようなものだよ。」

目の前に置かれた水にすがりつくようにカズマ達はグラスを口に付け飲みだす。

アラカは呆れるようにため息をつく

「いつもリユリが防壁の上にいるとは限らないんだよ。彼女も色々トウキョウでやっているみたいだし。」

「あーもー！うつせーな。でもアイツに助けられたなんて認めないからな」

「そーッスよ！あんなよそ者になんか助けられた事なんてな、認めないんすよ！」

カズマにつられてジュンがそう言うアラカはジュンを睨み付ける

少し殺気が漂う中

リユリが返り血を流すためシャワーを浴びてきたのだろう。首にタ

オルをかけて店に入ってきた

「アラカ、やっぱりここにいたか。私を探していたってマモルが言っていたが・・・」

アラカはリユリを視界に捕らえると目を光らせてリユリの近くへ行った

リユリは今の状況が分からないせいかアラカを見ているだけだ

「カズマがそんなにリユリが嫌いなら、二年前の決着付けなさいよ・・・」

低い声でアラカが言うと「何の話しだ」とリユリが呟いたらアラカはリユリを見て怪しく微笑む

リユリはその笑みを見て

やるしかない、こうなったら止められないなと思い

詳しい事は後から聞くことにした。

「何言ってるんツスカ！？あん時は確実に・・・！カズマさん？」

アラカの言葉を聞いたカズマはジュンの言葉を途中で止めて耐えきれなかった笑いを吹き出すように爆笑する

「クハハハっ！！良いじゃないか、また気絶さしてやるよ！リユリ！！」

「カズマさん！？」

「明日の午後だ。二年前と同じ所で決着付けようぜ！」

最後の水を飲み切ると

机に小銭を置いてカズマ達は店を出ていった

「アラカ。」

「何？」

「満足しているところ悪いが。何故こうなったのか教えて欲しいのと、私に用事ってなんだ」

リユリがカズマ達を見送ると冷静な口調でそう言った

それを思い出すようにようにアラカは「あっ！」と言い少し焦った

第一章？

メインストリートを通って、広間を右に曲がった所に《鍛冶屋、ロボット―武器まで》と鉄で出来た看板がぶら下げられた工場がある。ソラ爺と呼ばれるベテランの頭と息子のキリヤで切り盛りをしている鍛冶屋だ

アラカがリユリを連れてその店に入ると直ぐに鉄を打つ音が響きわたる

「ソラ爺いゝ！！連れてきたよゝ！！」

ソラ爺の耳に入っていないのだろうか

返信も無ければ、鉄を打つ音が消える事もなかった

「ソラ爺いゝ！！連れてきたよゝゝ！！」

アラカが息を切らしながら叫ぶとやつと鉄を打つ音がなり止み腰を曲げているせいか

リユリの身長 of 胸辺りしかない煙管をくわえた老人が出てきた

「ようやく来たか。」

「色々あったから遅くなっちゃったの。ちゃんとリユリ連れてきたからね。」

「ありがとな。それで新しい武器の使い心地はどうだ、リユリ。」

何も知らないアラカはリユリを見た

そつと、ナイフを取り出すとまだ手入れをしていないのか、蟲の返り血が付いたままだった

「私が作ったんだ、それなりに良いさ。あとで鍛冶場の使用料を払うよ。」

ソラ爺はナイフを見ると感心したように頷き。キリヤを呼んだ

「自分が作った物は使いやすੀとは思うが、そのタイプの武器はお前にとって扱いづらゐ品物なんぢやないのか？」

奥からキリヤが出てくるとその手には一メートルくらいだろうか、黒い布で巻かれた物が握られていた

「これをお前にやろう。名は《月光》と言つ」

黒い布が取られると

光さえも反射してゐないのではないかと思つほど真つ黒な二ホン刀が姿を現した

第一章？

リユリはナイフをしまうとキリヤから刀を受け取った

刀は思っている以上に軽く、一瞬、金属であることを忘れさせるほど軽かった

しつかり柄を握り、鞘からぬく

刃が姿を現すとアラカは感動するかの様に両手を口に当てる

「・・・刃さえも黒か・・・この特徴、オリハルコンだなソラ爺」

リユリが刀を構え眺めながら呟くと煙管を手に持ちニコリと笑う口から煙をソラ爺は空に噴き出す

「よう分かったな、リユリ。その通り、《月光》はオリハルコンで拵えたものだ。」

アラカは何の事が全く分からず、キリヤにそっと近づき小声で質問した

「オリハルコンって何？」

それに答えるようにキリヤも小声で言う

「オリハルコンっていうのは、ダイヤモンドよりも固くて、羽根のように軽い金属です。武器になると刃こぼれもしない、優れた武器になる品物です。」

「ふーん」とアラカは納得すると

《月光》を鞘に収めたりユリが《月光》をソラ爺の前に突き出したのを見た

ソラ爺は目を丸くする

「私には《竜牙^{りゅうが}》がある。《月光》はいらないよ、他に渡したら良い」
リユリは去るように店の扉に向かう

「《竜牙》は二年前の悪魔狩りで無くしたんじゃないのか？リユリ」

ソラ爺の言葉を聞いて足を止めたリユリは振り向いた

「武器は性能じゃない。」
その言葉を吐き捨て外へ出ていった

第一章？

リユリがいなくなると
鍛冶屋の空気が重くなつた

「ねえ、ソラ爺」

アラカがその空気をかき混ぜ始めるように口を開いた

「なんだ？」

「さっきの話にでてた《竜牙》って何の事？二年前に無くしたって
言つてたけど」

ソラ爺は近くにあつた椅子に腰を掛け思い出を語るように話し始めた

「《竜牙》っていうのはリユリがトウキョウに来たとき、百もの悪
魔を斬り倒した刀の名だよ。一目見たときあれは良い刀だと思つた
よ。《月光》とは違い白い刃の刀だった。」

「見たことあるような・・・無いような・・・」

するとキリヤが左腕をさすりながら会話に入ってくる

「リユリに助けられた人間は皆見ていますよ、《竜牙》を。彼女が
来てくれなかつたら命がなかつたですから。」

アラカはキリヤの言葉を聞いて
二年前、ちょうどこの日に起きた

静かな恐怖とリユリに会った時の事を思い出す

入る事を固く拒んだマモルを無視し防壁を飛び越え

マントが顔を隠れるほどかぶった人間がトウキョウに入ってきた

彼女は見分ける事が不可能に近い

人間に化ける魔法を使う悪魔達を次々と数を数えながら、始めはくすんだ白いマントも黒く染めていった

私の目の前に現れた悪魔が最後だったのだろう

私に向けられた銃弾の軌道を曲げ、悪魔の脳天に手に持っていた刀を投げ付けると力尽きた様に眠った

私がリユリと初めて会った時はそんなだった

次の日だった

リユリは最後の悪魔を殺した場所、私と出会った場所で何かを探していた

勇気を出して

『何か探し物？』

と私が質問をすると

見た目とは少し違う、透き通ったような声で

『・・・刀を無くした。大切な物を・・・』

と答えた無表情の顔が少し、悲しそうにも見えた

第一章？

カーテンをザッと一気に開けると温かい日の光が部屋の中に差し込む
ほとんど何も置いていない白い壁に囲まれた部屋

リユリが二年近く住んでいる部屋

この部屋は何を思ったのかアラカの母が
自ら経営している食堂の二階にあるマンションの一室を無料で貸し
てくれたモノだ

「リユリ、朝ですよー。」

リユリは「眩しい」と眩きタオルケットを頭まで被ったが直ぐにアラカにはぎ取られた

「対決は午後からだろ・・・寝させてくれ・・・」

そう言いながらアラカが持っているタオルケットを奪い取る

「休日のお父さんみたいなこと言わないでよ。」

アラカまたタオルケットをはぎ取り床に捨てた

「朝ご飯食べないと脳が働かないんだぞ。」

「平日のお母さんみたいなこと言って・・・分かった。起きるよ。」

リユリは左目をこすりながらベッドの端に座り
床に無造作に置いてあった鞘に収めてあるナイフを身につけた。

アラカはリユリが昨日と同じ服だということに気付き、部屋中を見
渡した

ハンガーに黒のノースリーブのロングパーカーがかかっているだけ
で何もなかった

「リユリ……」

「なんだ？」

リユリは靴を履きながら答える

「服ってそれだけ？」

「そうだが。それがどうした？」

アラカは慌ててリユリの肩を掴む

「リユリって女の子だよね！？もう少し服、持っとかないと！あー
もーショック！もっと早く気付けば良かった」

「……」

リユリはアラカが慌ててそう言うのと「何を今さら」っと言いたくな
ったがやめておいた。

もう一回考えろー私い、リユリが服を一着しか持っていない……
じゃあ……

リユリは洗面所まで行くと歯磨きを始めた
部屋の中ではその音しか聞こえない

「リユリ！」

いきなりアラカはリユリに飛び付いた

もちろん、リユリはその勢いで泡だった歯みがき粉を吐き出す

「ゲホっ！いきなり・・・何を・・・」

「決戦午後からだしさ、買い物行かない？午前中。
鏡こしに後ろを見ると

目を輝かせるアラカの姿があった

「買い物か・・・行くとしても何を買いに行くんだ？」

「リユリの服に決まってんじゃない！最低でも三日分くらいはない
とね。」

アラカは笑ってそう言った

リユリは呆れたようにため息をつき、軽く笑った

第一章？

一階の食堂へ降りて行くといつもより多くの人がいた

「皆、リユリを心配して来たんだって」っとアラカは言ったが、それが客が多い理由なのかは全くわからない

とりあえず朝食を食べようといろんな人に声をかけられながら席に座る

その時、注文もしていないのに目の前にいつもより大盛りのモーニングが机の上に置かれた

リユリは思わずアラカの母親を見る

「しっかり食べなさいよ」

さすがに娘であるアラカもその量に驚きを隠せなかったがリユリにとっては別に食べられない量ではなかった

「私は応援してるのよ貴女のこと。どうしても疑問が多すぎて信じられないのよカズマは。」

カズマは《竜殺し》の異名を持っているが、誰もカズマが倒したドラゴンの死体を見たこともなければ。その現場を見た事もない。

ただ、赤でも黒でもない

鮮やかな紫の血をかぶり帰って来た。

これが唯一カズマを《竜殺し》と呼ぶ理由だった。

「ごちそうさま。」

席を立ちリユリは店を出ようとする
慌ててアラカはその後についていく

「リユリの服買ってきて来るね。たぶん、そのまま広場に行くと思う。」

「行つてらっしゃい！カズマにギャフンと言わせて帰って来なさい。
夕食、豪華にしといつあげるから。」

アラカは笑って手を振り店を出た

店を一步出るとすぐにビルが立ち並ぶ

リユリの手を引っ張り適当な服屋にアラカは入って行く

「やっぱり、リユリはボーイッシュな感じが良いよね。リユリがス
カートなんてありえないしね。」

いくつかの店を歩き回ったがアラカが納得するものはなかった

もちろん、リユリも手にとって見てみるもの
手触りが納得できるモノはなかったし、デザインも良いものがな
かった。

それよりもリユリが選ぶ基準は戦闘時に動きやすく、丈夫なものだ

った。

五店舗くらい回ったときアラカは一つの店に目を付けた

「やっぱり此処しかないよね！」

リユリはふと看板を見る

アラカが好んで身につけているブランドの店だった

この店は基本的にスポーツ用品を扱っている店らしく、服も通気性が高い物が多いし丈夫な物も多い

「此処でだったら何かしらあるんじゃない？」

「そうだな。此処で決められたら良いんだが。後、二時間くらいで行かないとカズマがうるさいかもな」

リユリが服を見ながらぼそりと呟く
それを聞くとアラカは慌て始めた

三十分くらいたつとアラカがリユリの近くに走って来る

「ねえ！こんなのどう？」

リユリに手に持っていた服をあててみる

アラカが選んだ服は地味でも派手でもない、リユリの白髪にも合うちょうど良いＴシャツと黒の七分丈のパンツだった

「どうかな？」

「私は良いと思う。」

一つ候補が決まると次々と四日分くらいは決っていった

本当のところ、リユリもこのブランドは好きだった
そう言うよりも気になっていたと言った方が正しい

「もうそろそろ時間じゃない？」

「そうだな。買って来る。」

そう言つて籠を持つとリユリはレジの方へ歩いて行つた

アラカはそれを見送ると「さてと・・・」と言つて何かを探し始めた

リユリは会計を済ませ元の場所に戻つて来るがアラカの姿がない

肩を叩かれ後ろを向くと

頬に人差し指が食い込んできた

「アラカ？」

「ふふつ。はいコレ！」

アラカは長方形の箱をリユリに突き付ける

リユリは何も分からないまま箱を受け取る

「リユリがトウキョウに来て二年になるじゃん。絶対、誕生日は一回は来てると思ったからプレゼント！」

第一章？

リユリが箱をそつと開けると黒い革製の手袋が入っていた

「これは・・・？」

「理由は聞かないけど、リユリずっと手に包帯巻いてるからさ、見られたくないのになって・・・でも、ほら！色違いなんだよ！」

アラカは右手を出すと白いアームカバーをしていた

「なんて言うか・・・絆の証みたいだな。あつ！勝手にこんなこと言うなんてダメだね。」

リユリの方をそつと見ると彼女は笑いを堪えるように肩を震わせていた

ちよつと一息つくと

ボソツと微笑しながらリユリは呟いた

「・・・絆か。そうだな、大切に使わしてもらうよ。」

包帯を巻いている手の平を見つめたりユリの顔は嬉しそうにも見え、悲しそうにも見えた

不意に時計を見ると時間ギリギリなのが分かり
アラカが慌てる

「ヤバイよ！時間！！」

「ホントだな。」

リユリが冷静に言葉を返すとアラカがリユリの腕をつかみ走り始めた

広場には町を守る為にシールドがはられていた

二年前はシールドをはらなかった為
トウキョウが一部壊れた

当時、喧嘩を売ったのはカズマだったからトウキョウの幹部達になり叱られたそのせいもあってか
カズマがそうさせたのだろう

リユリ達がついた頃にはまだカズマの姿が無かった「自分で時間決めといて遅刻してる」とアラカがイライラしながら待っていた

リユリの場合は二人の喧嘩に巻き込まれたような形だったからアラカの言葉に動じる事は無かった

「珍しいな、リユリが少し遅れて来るなんて」

背後から聞こえた声の持ち主はソラ爺だった
その後ろにはキリヤもいる

「ソラ爺、来てたんだ。こういうのあんまり好きじゃないって言うてたから来ないかと思ってた。」

「あははは。最初は来る気なんて全く無かったんだが、今朝いきなりカズマの泣きっ面が見たくなっただけ。」

その言葉をリユリの目を見て言ったが彼女は少し眉をひそめた

第一章？

結局カズマはリユリ達が着いた一時間後に広場に来た

たぶん、余裕をかまして寝坊したのだろう

（髪が若干はねていたから）

「リユリ！」

リユリがシールドに入って行こうとしたときアラカがリユリを抱き締めた

「いけないよアラカ・・・どうした？」

涙目になりながらアラカはリユリの目を見つめている

「勢いだっただけ、私のせいでこんなことになってゴメンね。」

「お前が謝る必要はないよ、いつかは決着付けなければならなかったのかもしれない。少しそれが早くなっただけだ」

そう言っただけで着ていた上着をアラカに渡す

「今はコイツがある今までみたいに棒切れで戦おうとは思わないさ。ベルトにぶら下がるナイフに手を添えてリユリは少し笑いシールドの中へ入っていった」

「始めようか。できれば早めに終わらせたい。」

「あん時は無口だったのに、よくしゃべるようになったじゃないか。まあ、言われなくてもすぐに終わらせてやるよ!!」

カズマはレーザー銃を取り出し撃った

普通の銃より弾丸が速いがリユリの自慢の脚力で弾丸を避けられた
それを見てカズマは舌打ちをしてまた次々と弾丸を放つ

それも全くりユリにはあたらずシールドに吸収されるだけだった

「少しぐらい当たったらどうなんだ!!」

「お前は人を殺す気か？戦法も変えないで馬鹿みたいに乱射しているくせに。」

息を乱すカズマを見てリユリはため息を着いた

「分かった、終わらせてやろう。見失うなよ。」

その場から消えカズマの後ろに立つ

「見失うなと言っただろう？」

「クソッ!!」

カズマは気配を感じたからか、彼女の言葉が耳に入っただけなの
素早く銃口を後ろに向ける

シールドの中だけでなく
その外まで銃声が轟いた

「リユリっ!!?」

思わずアラカはシールドに手を突く

カズマは銃口を向けたまま
汗を流し、息を荒くさせながら立っていた

「言っただろう、見失うなど。私の勝ちだ」

リユリはナイフを逆手で持ち
刃をカズマの首ギリギリの所で止めていた

カズマはシールドが無くなると同時にその場で崩れ落ちた

それを見て構えていたナイフをそつと鞘に戻し
リユリはアラカに強く抱き締められた

「おめでとう、リユリ。」

「私は大したことはしてないよ。」

第二章 ？

カズマがリユリにストレート負けした日から数日後

あの日が無かったかのようにトウキョウの町はいつも通りだった

リユリはまた防壁の上に登り歌を歌っている

そつと近くにいった隣に座り歌を聞こうとするとリユリは歌うのを止めた

「前から気になってたんだけど、何の歌なの？」

リユリは少しコツチを向いてまた砂漠の方を見る

「私の祖国の歌、この世界を歌ったものだ。これを知っているのは私の家族しかないがな。」

「私は好きだよ、その歌。」

「そうか・・・」

その時リユリの顔が少し悲しげに見えた

いつも思ってた事

リユリはたまにこの顔になる

何でだろう？

でもこの時、なんでもすぐに質問しちゃう私でもリユリに聞く事はしなかった

「そういえばあの時からソラ爺は全然『月光』の事言わなくなっただね。」

「きつと、刀以外でも私が戦える事が分かったからじゃないか？」

リユリがナイフを取出し言った

「そういえば、そのナイフは何でそんな形になっているの？U字って言うのかな。」

リユリは防壁に軽くU字になっているナイフをぶつけた

その時

ナイフから優しい金属音が響いた

「この音が出したかったから」

「・・・っえ？」

耳を疑った

まさかそんな理由で通常じゃあり得ない形にしたって言うなんて

「このナイフは突きにはむかないが切るとなると普通のナイフ異常なんだ」

「まあ、リユリらしいって言えばリユリらしいかな。」

「どういう意味だ？」

私の言葉にリユリが反応する

「だって、トウキョウでは電気を使った武器が普通じゃんカズマのレーザー銃みたいに。でもこのご時世にリユリは反発するみたいに刃物で戦ってるじゃない。」

軽く笑いながら私がそういうと
リユリは少し考えて微笑した

「確かに、そうかもしれないな……。ただの機械音痴ってだけなんだが。」

「なるほど、そういう意味でもあるね。」

一年前くらいに家にあった電子レンジを壊した事があった
何をしたのかは分からないけど私が来たときにはレンジが黒い煙を
上げていて

ただリユリは驚いたように顔を黒くしていたのを覚えている

この時に「機械音痴の人間がいたんだ」と思った

第二章？

「いきなり着いてこいつて何の用だ？カズマ」

「良いから来い。来ればわかる」

リユリは人気のない路地に連れて来られた

周りは相当暗い

よく迷いなく進んで行けるなと感心するほどだ

カズマはまだまだ進んで行く

この先に何があると言っんだ

カズマが立ち止まると目線の先に一つの今にも消えそうな光が見えた

かすかにその光のおかげで鉄製の扉が見える

「着いたぞ。入れ」

カズマはその扉を開けてリユリが中に入った後しっかりと鍵をかけた

中は外見と比になるようにとても明るい

そこでかなり多くの人達が機械を使って何かをしていたり、作ったりしている

見回して見ると見知っている人も何人かいるようだ

「ここは一体・・・」

リユリは目を丸くして驚く

その姿を見てカズマは笑い、話し始める

「トウキョウを守る為にだけ創られた場所『ルート』。その名の通り、ルートの警備システムはトウキョウの地下中に張り巡らされている。」

「なるほど、だいたい分かった。じゃあ何故だ？何故私をここに連れてきた。あれ程よそ者と言っていたお前が・・・」

「二年のうちに貴女は沢山この街を救ってきたからよりユリ。」

そう言ったのは肌が綺麗な茶色に焼けた眼鏡をかけている、いかにも真面目そうな女性だった

「マーマル!？」

「驚かないでよね。一樣私が貴女をここに入れるように上に言ったんだから」

「そういう事じゃ無い!」

リユリはマーマルの服を掴む

「貴女の言いたい事は分かるよ。それは今言うことじゃない。」

リユリは刃を食い縛り、マーマルを睨み付けた

「とりあえず、こっちへ来て。上の人たちに紹介しなきゃ、貴女に
来た意味がないわ。」

第二章？

リユリがマーマルの言う『上』に会っている時

トウキョウから遠く離れた砂漠に

巨大な虫達とそれに乗る人影があつた

「誰だろね。僕が作った鉄の蟲を倒したの。」

「ワタシハ見タ」

手のひらサイズの蟲が影の肩にとまる

「誰？人間？まあ、人間以外にいないと思うけれど。」

「白髪ノ女ダッタ。ワタシモ殺サレル所……ギャッ!!」

影は何も言わず蟲を握り潰した

蟲達は少し主人の殺気を読み取った

「わー悔しいな。誰かは知らないけれど、僕が直々に白い女を殺してあげるよ。」

影が乗っている蟲はさっきより速く飛んだ

やっと部屋に戻れると上着と装備をベッドの上に投げ捨ててソファにどかと座る

「契約書だかなんだか知らないが、機械いじらせやがって・・・」

リユリはロートに半強制的だったが入ることになり誓約書を書かされた

トウキョウにはもう紙や鉛筆という物は存在していないと言ってもいい

それ位、機械が発展していて何をするにも機械だ

だから、機械音痴であるリユリは普通の人間なら数分で出来る事を何時間もかけて遣り遂げた

少しの間

身体のを抜いてソファーの上で横になる

「はぁ・・・」

リユリはズボンのポケットから別れ際にマーマルに渡された手のひらサイズの黒い板の様な物を取り出し彼女の言葉を思い出していた

『とりあえず、これ持つといて。何かあったらこれを通じて連絡するわ。』

リユリはソファーに横になりながら黒い板を見る

『携帯』と言う物らしいが・・・

「渡されたのは良いが、どうやって使うんだ？」

携帯をうらつ返してみたりライトに照らしてみたりするが全く使い方が分からなかった

「はぁ・・・。」

リユリはまたため息をつき相当疲れていたのだろう
そのまま眠りに就いた

私の目の前にソーマがいる

今までの事は夢だったのだろうか？

「お願いがあるんだ、リユリ」

「どうした？いきなり。お前らしくもない」

ソーマの顔は笑っているが心は泣いていた

あっ・・・そうか

私は過去を見ているのか

「願いと言っても一つだけ。もしも、僕が死んだら私の家族を・・・」

「それ以上言うな。・・・私達はキズナで結ばれている。そのくらの事は分かっているよ。」

「ありがとう、リユリ」

そう言った彼の顔と心は嬉しそうだった

その顔は今でも鮮明に覚えている

次の日

雨の降りしきる中

私は必死にソーマを守った昨日の約束を果たさない為に

でも、目を離れた隙だった

私の目の前で彼は倒れた

泥水に身体を打ち付け

届きそうで届かない腕を伸ばし

片手に彼の『竜牙』を握り締め

その名を声が消えるまで叫んだ

いつも繋がっていた心が途切れても、ずっと涙を初めて流しながら
叫んだ

第二章 ？

「ソーマ!!!」

リユリは飛び起きた

また・・・見てしまった。・・・？

頬が濡れていた

寝ながら泣いていたのだ

素手で涙を拭う

不意に手の甲を見てソーマの願いを思い出す

「これさえ無ければ。ソーマ、お前を救えたのにな・・・」

私はまたキズナを結んでしまったよ

リユリはソファアの端に縮まった

はっと顔を上げ

ソファアを飛び出してベッドの上の上着と装備を取り扉に向かった

ノックが聞こえ扉が開かれると

アラカが驚いて後退りをした

「リユリ!どこ行くの!」

そう言われるとリユリは携帯をアラカに投げつけると落とさないよ

うに必死にアラカはキャッチした

「それでマーマルっていうやつに連絡をしてくれ」

「連絡って！何を！？」

「蟲の魔法を使う悪魔が来ていると言え！私は先に向かう！！」

リユリは廊下の窓を開けて屋根を伝いながら防壁に向かって行った

アラカは受け取った携帯で電話をかけた

「もしもし、マーマルさんですか？」

『ええ、そうよ。その声アラカちゃんね、貴女の話は聞いているわ。』

「リユリからの伝言です。蟲の魔法を使う悪魔が来ているそうです。それと先に行っているって」

『分かったわ。アラカちゃん、貴女は早く地下に避難しなさい。』

その言葉を最後に電話は切れた

なんで、リユリは顔が広い私も知らない人を知ってたのかな？それに、また警報がなる前に悪魔の存在に気付いたし、マーマルさんって人もそれを信じた・・・何で？

アラカは疑問を抱えながら一階に降りていき
母親と荷物を纏めて地下に避難した

改めて思う

リユリは何者なのか
本当に人間なのかと

第二章？

アラカからの連絡を受けて
ロート中が慌ただしくなった

「警戒体制をLEVEL FIVEに上げて！火属性のシールドを
街全体に張りなさい！！早く！急いで！」

そうマーマルが指示を出すと人々は動き始める

「カズマ、貴方たちは今すぐに防壁に行つて。リユリと合流して。」

「分かった。蟲の悪魔なんだから・・・実行班のREDは俺に着いて
こい、後は地下で指示を待て！」

カズマはそう言う二十人を連れて防壁に向かった

「気をつけて、指令班が全力でサポートするわ。」

「ナイフは四本、向こうはざっと数えて五十・・・作り手が一人
か。」

目を閉じ、聴覚を研ぎ澄ませて情報を収集する

背後から二十人ほどの足音を感じ立ち上がる

「やっと見つけたぜリユリ。どうだ、来たか？」

「見えはしないが、遠くからきつと蟲に乗っているのだろう。とてつもない速さでこっちに向かっている。」

「そうか……。REDは蟲に備えて武器を構えておけ。」

ロートのメンバーに指示を出すカズマを見てリユリは外を警戒しながらたまっていた疑問をぶつける

「あんなに馬鹿な事をしていたお前がなんでこんな組織の指揮をとっている。」

カズマは後頭部を手でかきながら答えた

「ちょっとした理由があつて言えなかったただけだ、お前と同じだよ。」

「私の事……。マーマルから聞いたのか！？」

カズマは初めて振り返ってなびいた前髪の下にあるリユリの右目を見た

正直、カズマはゾツとした話に聞いていたものより恐ろしく、美しいモノだった

「ああ・・・そうだ、彼女の正体も知ってる」

「皆の正体は知っているが自分の事は話さないのか。まあ、私は聞き出しはしない。マーマルが知っている事は全てではないしな」

リユリは腰につけているナイフを一本取出し即座に投げた

二つの叫び声がトウキョウの数メートル先で轟いた

「来たぞ、お前達には見えない『空』の蟲が」

「何!!」

「私は『空』のをやる。マーマルに伝えろ、蟲は虫とは違うもし出来るならシールドは『靈氣』にしろと。」

「・・・はっ!? 何の事だ? 『れいき』って!?!」

「言えば分かる! 他のヤツはお前らにも見えるはずだ!」

防壁を越え砂漠の中へ跳び込む

落ちたナイフを拾い上げるとリユリは目を閉じまた聴覚を研ぎ澄ませる

虫が羽をばたつかせる音だけに集中してナイフを動かした

見えない相手だ・・・こうするしかない・・・

どんどん羽ばたく音が消えていく

完全に全て消えた時
目を開ける

実体化した蟲がリユリの足下に散らばっている

「・・・『空』の蟲はやったか。」

リユリは息を軽く切らしながら真っ直ぐ前を見る

・
・
流石にアイツが近くにいないと・・・後はあいつらのサポートに・

すると、腹部の当たりが燃えるように熱くなった

「君だね、僕が作った鉄の蟲を殺したのは。」

第二章？

リユリは大きく回り幼い声を振り払った

「くそつ、外したか・・・痛・・・」

わき腹の傷がバツクリ開き、血が流れだす

なぜ気付かなかった、これほど近かったのに・・・やはり地下に避難したせいか・・・

リユリの目の前には十代になったばかりのような少年が笑いながら立っていた

「お姉さん、人間じゃない・・・。なんで、人間の見方をするの？」

少年の手には紫の液体がべっとりついていて

リユリは片手でわき腹を力一杯押さえ、止血をするが白い砂漠の砂を紫に変えていた

「お前みたいな悪魔には分からない事だ。」

「ふーん、まあどーでも良いけど。いつまでもこのままだったら終わんないよね。」

少年は腕を前に出す

「死んでよ、お姉さん」

手のひらが光るとそこから巨大なムカデのような蟲が飛び出して来た

「主人、ワタシハ何ヲスレバ・・・？」

「あのお姉さん、殺しちゃって。」

蟲がリユリの方を見る

ゆっくり近づいて来るのが分かった

ナイフは後三本・・・前よりも巨大な相手、それを作った悪魔・・・
いけるか・・・？

少し遅かったが傷は半分ほど閉じかけている
痛みは残っていたがやるしかなかった

上着を脱ぎ傷口にまいて止血をした
多少は動きにくくても仕方がない

「カズマ！！聞こえるか！！！！」

「聞こえてる！」

カズマ達ロートのメンバーはリユリに言われた通りに蟲を何匹も射
ち落としていた

「聞くなよ！」

リユリがそういうとカズマは仲間に無線で何かを伝えた

すると、いきなり攻撃を止めた

「えっ！？どうしちゃったの？降参するの？」

「主人・・・ヤリマスカ？」

リユリはロートのメンバーを確認すると大きく息を吸った

「私達は降参なんてしていない・・・勝つ為に最後の手段をとるだけだ」

アイツがいないなか何処までいける・・・

「まずはデカいのからだ！！」

リユリは口を開けて蟲を見て、目を閉じる

いきなり蟲は苦しみだした

「ナ・・・ナニガ・・・」

巨大な身体をくねらせ砂の上に倒れた

煙になり消える

「何！？何したの！？」

すると

次々と蟲達が崩れ落ちていく

リユリは息を荒くし

口から紫の血を吐き出した

「後はお前だけだ。」

「待つてよ！僕は蟲を・・・」

「もう、出せない。」

「・・・っえ？」

「私が腕を切り落とした。それなんだろう、魔法の源は」

少年は腕を見ると肘から先が切り落とされ黒い血液が滴り落ちていた

「うわゝーーーーー！！」

少年は泣き叫びだす

「うゝう・・・」

「お前は人を殺しすぎた・・・私が逝かせてやろっ」

「マジックの種くらい最後に教えてよ・・・」

リユリは少年に背を向け歩き始める

「『同調』だ」

第二章？

目を開けると真っ白な天井が広がっていた

此処はどこだ・・・？

勢いよくベッドから起き上がった

・・・！？、痛くない

そつと傷のあった場所を触った

「あら、起きた？」

声が聞こえた方向をすぐに見た

マーマルだ

「そんなに警戒しないでよね。仲間なんだからねー様。」

「すまない・・・外が騒がしいようだ。頭が痛い」

マーマルは笑う

「久しぶりに能力を解放したからよ。外に彼女が来ているわ。」

「そのくらい分かってる」

「ちょっと！リユリに会わせなさいよ！いるのは分かってるんだから！！」

カズマが必死に病室に入ろうとするアラカを数人のロートのメンバーで止めていた

「ダメだっていつてんだろ！！ヤツは大ケガしてんだ！」

「だからこそ会わせろって・・・言ってるのよ！！」

アラカはカズマに飛び掛かり鼻を思いつきり摘んだ

ロートのメンバーは必死にアラカをカズマから離そうとするが物凄く力が強すぎて離れない

「イデデデデデ！！」

「早く会わせなさい！！」

「ダメだつで！いつでんだろ！！・・・鼻ぎゃ！！」

アラカは全く力を抜く様子を見せない

どちらかというと思いつきり力を入れ続けている

「お前らうるさいぞ。静かにしてくれ、耳が潰れる。」

病室の方を見るとリユリが立っていた

「リユリ!!」

アラカがリユリに飛び付く

カズマは鼻から出る血を必死に押さえた

「あつ、ゴメン！ケガしてるのに抱きついちゃて・・・」

「そうなると思って食い止め・・・ハッ・・・」

カズマが呟くとアラカは殺気をカズマに向けた

すぐにカズマは黙る

「・・・。傷は大丈夫だ、治った。」

リユリはそう言って身体に巻き付いている包帯を取った

「!？」

カズマは驚いた

リユリが悪魔を倒した後すぐに倒れた

あれほどの怪我だ立っている事もできなかっただろう

しかし血液があれば出るくらいの傷だった

なのに、数時間しかたっていないのに傷がスツカリ消えていた

本当にこの種族には驚かされる。

「リユリ、ちょっと来い。」

カズマはリユリの腕を引っ張って
病室に入り扉に鍵を閉める

「ちょっと！カズマ！！」

「なんだ、カズマ。」

「いつ言っつもりなんだ？」

「何のことだ。」

リユリは真顔のままカズマに言った

その言葉を聞いてカズマは壁を殴る

「真実だよ！お前の正体をアラカにいつ言っつもりなんだ！！」

「ちょっと！やめなさいよカズマ！」

マーマルが止めに入ろうとするがカズマに睨まれ動けなかった

「約束を果たすまでは言っつもりはない。」

「一番悲しむのが誰か分かってねーな、お前は・・・」

「ならば、お前から真実を話したらどうだ。気になっていた、なぜお前が紫の血を浴びる事になったのか。通常の武器では私達は貫けない。」

「.....」

カズマは何かを言おうとしたら黙り込んだ

マーマルがカズマの肩に手をのせる

「私も貴女にはアラカちゃんに真実を言ってもらいたいわ。しつかりキズナを結ばないと貴女は.....」

マーマルは言葉を続けなかった

扉に手を掻け出ようとしたときリユリは呟いた

「私は、アイツを守らなきゃいけない.....それがソーマの最後の願いだ。」

「だからなんだろう.....だから、あんなに血を流したんだろう!!」

カズマが叫びリユリの胸ぐらを掴んだ

「世界がお前を.....消そうとしてるんだろ。」

「そうだ。私が人類を裏切っていると思っている。」

カズマは手をゆるめた

「あの叫びをアラカにだけは聞かせないでくれ」

リユリは何もかえさず病室を後にした

「こんな俺でも、一応アイツの幼なじみなんだ・・・」

第二章 ？

ニホンのどこか

トウキョウのずっと遠くにあるところで一人の男が報告を受けていた

「偵察が敗れたか・・・」

「はい、でも想定内でしたが。」

報告をしている長髪の女性は笑顔を崩さなかった

「ソティアはいるか。」

「はい、王様、僕はここにいますよう。」

壁から一人、十五歳くらいの少年が出て来て
男の前の立った

「トウキョウへ行つて人間を抹殺してこい。お前なら一日でできる
だろう」

ソティアはヘラヘラ笑いながら頭を下げて床の中へ消えていった

「では、私は戻ります。」

「赤い血は全て始末する。・・・黒き血においてな・・・」

女性は後ろを向き歩いていくと透明になって消えていった

「あーっ！だからそこはそうじゃないって。」

翌日リユリはアラカに携帯電話の使い方

（と言っても、初歩的な事だけだが）を教えてもらっていた

一つの動作にかれこれ二時間費やしている

「だから！・・・もう、そこを押すと電話切れちゃうんだって。
じゃあ、もう一回」

「わかった。」

リユリの顔は変わることはないが汗だけは軽くでていた

『聞こえていますか？リユリ。』

人間には聞こえない声がリユリの耳に入ってきた

「アラカ、すまない。急用を思い出した。続きは後でまた教えてくれ。」

そう言つと席を立ち
店をでていった

「まあ・・・一時間もやってたら嫌にもなるよね。」

『もう大丈夫だ。話せる』

リユリは人気のない路地裏に入り声と話す

『その感じからするとキズナに正体を明かしていないのですねリユリ。』

少しため息をついて壁にもたれる

『私にはやらないといけない事がある。それが終わったら言っさ』

『貴女らしい理由ですね。それより、ソティア達二人がそちらへ行くそうです。』

『奴らか・・・厄介だな。』

『私の予想では貴女の力を最大限に使わないと彼らは倒せないですよ。どうするんですか？』

『どうにかするさ・・・私はこの街を守らなければならない。』

『負けないように、あの子を悲しませないように頑張ってください。』

声はずっと消えていった

さて・・・奴らのせいでやる事が増えたな。

第二章 ？

まずは、この事をマーマルだけに伝えなければいけない

リユリはポケットの中から携帯を取り出すが少し考えて閉まった

さすがに練習中とはいえ
誰かに聞かれては困る

ビルを飛び越え、直接言いに行った方がいい

そう考えたリユリは早速行動にかかった

奴らが此処へ来るまで最低でも二、三時間はかかる。それまでに
避難を・・・

「それは本当なのね。」

「トウキョウがピンチなのに嘘なんかつくはずがない。」

普段はすぐには会えないが、運が良いのか珍しくすんなり彼女に会えた

「なんでも良い。なにか理由をつけてトウキョウとは違う場所に入

々を避難させないといけない。」

マーマルは少し考えた

リユリの考えが分かると

彼女はリユリの肩を掴んだ

「・・・！？。ダメよ！リユリ！一人で・・・」

「やるしかない」

「それなら、私たちも・・・」

リユリはマーマルを殴った

マーマルは床の上に倒れ驚くように目を見開いている

リユリの腕は通常とは違う方向に曲がっていた

「お前は、防御型だろう・・・これが証拠だ。」

「・・・それは貴女が、彼女にし・・・」

「関係ない。とりあえず伝えた。後は任せるよ・・・」

リユリは部屋を後にした

そんなに悲しそうな背中でも、説得力ないじゃない

マーマルはそう思った

背後から声が聞こえる

「ウチの存在、ばれてたかな？マーマル」

「きつとばれてたわ」

部屋の奥から

一見、男の子に見える少女がひょっこり現れた

「あと、正体もね。」

「ふーん。なんで分かるんやろ、不思議やな。」

マーマルは彼女の方を見ると肩についているホコリをはらった

「『音』よ。音を聞いているの。」

「音？なんでまた？」

大きな机にある椅子をマーマルはひき、彼女に座るように言った

「そんな事より。トウキョウの皆に避難勧告をスズネ隊長」

「せやね。・・・トウキョウに住む皆様にお伝えします。第二避難所に集合してください。」

スズネはさっきまでとは別人のようにマイクでアナウンスをした

「一人のこらず、全員第二避難所へ。……こんなもんかな？」

マーマルはそう聞いてきたスズネに笑顔で答えた

「文章考えたの、私じゃない。で、私たちはどうするの？私のキズナ」

「彼女が言う通りにはしゃん。全力でトウキョウを守る、君の力で。」

スズネのアナウンスで静かだったトウキョウは騒がしくなった

何が来るのかは知らない

しかし、なにかしらの危険が来る事は皆分かった

「リユリ！なにかあったの？アナウンスで避難所へ行けって。」

予備のナイフを出来るだけ装備をしているリユリにむかいアラカは問い詰める

リユリは手を止める事無く、準備を進めた

「アラカ、お前は早く行くんだ。」

「でも……、行けないよ！リユリがこの前みたいに傷ついて帰っ

てくるぐらいだったら私も・・・!!」

そう言うとりュリはいきなりアラカを抱き締めた

リユリの思ったよりも冷たい肌がアラカの頬にぶつかる

「リユリ・・・?」

「・・・」

「どうしたの?」

「まさか・・・これほど早く・・・」

アラカはそつと目線を下げた

鉄の長い爪の様なものがリユリの背中に突き刺さり
血が出ていた

紫の血が・・・

「外したあゝ、せつかく探し出したのにいゝ。」

痛みをこらえて背中に突き刺さる爪を抜くと
声の方向に投げた

だが、そこには壁しかない

「よくうゝ僕の間所が分かったねえゝ。」

「どうせ、ヤツも来ているんだろ。」

「『ヤツ』ってえゝキズナの事おゝ？来てるよゝ光が邪魔してえゝ通れないってえゝ待ってるんだあゝ」

「マーマルか・・・あれほど言ったのに・・・」

そのとき、アラカの頭の中は混乱していた

紫の血は人間のものじゃない

じゃあ、なんでリユリは私を助けてくれた？

「アラカ、大丈夫か？」

リユリの優しい声が聞こえる

「お前を安全な所へ連れていく。そこで・・・」

リユリは何かに戸惑ったようだった

「全てを話そう。」

また、あの悲しそうな顔だ。

アラカは少し頷く

すると、リユリがまたアラカを抱き締める

「しっかり、掴まっている！」

そう、言って走りだした

いつもより速い
機械よりも速かった

窓を突き破り外へでる

アラカはその時リユリにしがみ付きながらもリユリが怖いと思った

第二章 ？

リユリとアラカは路地裏に降りた

もう、皆避難したのか誰もいない

「リユリ・・・本当の事って・・・」

まだリユリの身体からは紫の血が滴り落ちている
少し息もあがっているし苦しそうにも見えた

「・・・十年前、まだ人間と悪魔が殺し合いなどしていないときに私はトウキョウにいた。」

アラカは驚きを隠せなかった

「十年前って私、五歳！おかしい、二年前に初めて会ったんだよ！」

「そのときのトウキョウはもっと広がったし、砂漠など一切無かった・・・っ痛。だから、気付かなかったただけだろう」

リユリは話ながらズボンの生地を破り止血をした

「アイツ、執念深い・・・毒まで塗ってあったか・・・。アラカ、お前が思っている通り姿形が人型をしているだけで私は人類ではない。」

「なんで、私の考えが分かったの？」

リユリは壁にもたれ座り込んだ

「顔を見れば分かる・・・いや・・・、まさかな・・・」

自分の体力が切れるのがわかる

力が全く入らない

「・・・リユリ?・・・リユリ!？」

「私の血の臭いを追ってさっきの悪魔がくる・・・。安全な所へ行け・・・そして、生きろアラカ」

涙を流すアラカは笑った

「リユリ・・・泣きながら言われても、説得力がないよ。」

リユリは気付いていなかった

自分の目から涙が出ている事に

少しするとカズマが二人の所にやってきた

「おい!大丈夫か!!!」

アラカは必死に泣きながらリユリに呼びかけていた

「大丈夫じゃねーな・・・。」

「どうしよう！リユリが、リユリが！！」

カズマはリユリの近くにいき
口元に手をかざした

・・・！？。息をしている？・・・もしかすると

「アラカ、よく聞け。リユリはかるうじて生きている。今から言う
ことをやるんだ、いいな？」

アラカの目を見ながらカズマは力強く言った

リユリがはめている手袋をカズマは外した

彼女の左手の甲には薄ら刺青の様なものがある
それを見るとアラカは少し驚いた

「これ・・・私にもある、右手に。」

そう言っただけでアラカは自分の手袋を外した

同じような刺青がアラカにもあった

カズマは確信するように頷く

「手を握るんだ。それだけで、リスクを背負う事になるがリユリは助かる。」

「リスク……。それでも良い。親友を失うよりずっと!」

アラカがリユリの手を握った瞬間

風がどつと吹きリユリの姿が消えた

「やったのか……?」

カズマが突風に少し驚きながらアラカに言った

アラカは笑いながら泣いた

「いるよ。リユリはあそこに。」

アラカの指差す方向には

まわりを見渡す白く輝くドラゴンが飛んでいた

『ここは……。トウキョウか?』

頭の中にリユリの声が響くと答えるようにアラカは頭の中でリユリに呼びかける

『そうだよ、トウキョウだよ。リユリ……。生きてて良かった。』

白いドラゴンは一度『空』になると人型のリユリになった

おもいつきりアラカに飛び付かれる

「良かった！良かったよー！」

泣き叫ぶアラカに対しリユリはキョトンとしてカズマを見た

「リユリ、テメー次は絶対にアラカを悲しませるなよ。」

「分かってる。アラカは本当に良かったのか？」

リユリはそつとアラカの目を見るとアラカは無言で頭を縦に振った

「なら、ヤツを倒しに行こう。マーマル達も限界に来ている。」

素早く装備していたナイフをなげた

リユリは壁に向かって睨み付けた

「いつまでいるつもりだ。ソティア。」

笑いながらナイフの突き刺さる壁からソティアは出てきた

「生きてたんだあゝ。リユリちゃん」

第三章 ？

ソティアを睨み付けるリユリはゆっくり上着を脱ぎアラカに渡した

「これを持っていてくれ。」

「わかった。頑張つてねリユリ。」

ソティアは笑いを止めようとはしなかった

むしろ、リユリを襲ったときより笑っているように見えた

「そつかあゝ君がリユリだったんだね。気付かなかったよ。」

リユリはソティアを無視してアラカに話し掛ける

「アラカ、カズマが言っていたリスク一つ目だ。」

「何個もあるんだ、リスク……。でも後悔はしてないよ。」

リユリから預かった上着をギュツと抱く

「ドラゴンはキズナを持つと、戦闘時にキズナを守る以外は思考はキズナのモノ。」

「どうゆつこと?。」

リユリがいきなり振り向きアラカとカズマを伏せさせた

アラカは咄嗟に目を閉じた

その瞬間、緑色のドラゴンがソティアの近くに降り立ち人型になった

「こいつ時ですよ。お嬢さん。」

ソティアは爆笑した

「な〜にも分かっていないみたいだよ〜。でも〜リユリちゃんに会えて良かったね〜ミツクう〜」

ミツクと呼ばれてドラゴンはリユリとは少し違う感じがした

アラカは目を開けるが真っ暗だった

『リユリ?』

「カズマはわからんがアラカは助かったようだな。」

一気に周りが明るくなる

一瞬でリユリは翼だけを出して二人を包み込み、攻撃から身を守ってくれたのだ

「カズマ、大丈夫か?」

「大丈夫だ。話には聞いていた。アイツ、水の『膜』だろ。」

ミツクは手をたたいた

まるで、正解だと言うように

「関係ないですけど。リユリ、貴女は無事ではないのでしょうか？」

ミックは指で自分の目を指した

リユリは動じていない

「・・・・・・？」

アラカはリユリの目を見たがリユリは見返さなかった

「目が見えていないんだろ。リユリ」

「そんなところは問題ない。何より大変なのはコイツらをどうするかだ。」

リユリがそう言うつとアラカは頷き、走りだした。

「おい！どこ行くんだ！」

「カズマ、アラカについていけ。」

わけの分からないままカズマはアラカの後を追いつけた

「これで良い。いつでも来ていいぞミック。」

身体を細かく震えさせたミックの顔は怒りに燃えていた

「十年前もだ・・・・目を見えなくしてもお前は顔色一つ変えずにいた・・・・ム力つくんだよ！その顔が！！！」

腕を壁に打ち付け建物を崩壊させた

ミツクは前髪を掻き上げ
深呼吸をする

「此処じゃ狭すぎます。もっと広い所へ行きましょう。」

「その意見、のもう。」

「どこ行くんだったアラカ！」

「ソラ爺の所。リユリが『月光を持って来てくれ』って。……
今のうちに教えてカズマ。残りのリスク……」

カズマは口をつぐんだ
少し考える

「どんなに過酷でも、大丈夫か？」

「大丈夫。」

「分かった。お前が気を付けなきゃ行けない事は、死なないこと。」

「どういつこと？」

「ドラゴンも一緒に死ぬからだ。それと……」

カズマは続きを言おうとするがなかなか声が聞こえない

「……キズナを結んだドラゴンが死ぬと、どこにしようがドラゴンの叫び声が耳を閉じても頭の中に轟く。」

「わかった。ありがとう、カズマ。」

ソラ爺の店の前に着くがやはり避難したのだろう店は閉まっていた

「ダメだ。開かない、きつと逃げたんだ。」

「いるよ。ソラ爺はいる。」

そう言っアアラカは後ろに下がると扉に向かって突進した

すると、扉が開きアラカはそのまま入って行った

「やるな……アラカ」

「ソラ爺ー！！いるんでしょ！！返事……ソラ爺。」

隠し扉からソラ爺は姿を現した

キリヤも一緒にいる

「静かにしろ。敵に気付かれたらどうするつもりだ。」

「大丈夫よ。リユリが今戦ってる。リユリからの伝言、『月光』を渡してくれって」

『月光』の言葉を聞き
ソラ爺は笑顔を見せた

「そうか！使う気になったか！今から持ってくるよ。」

ソラ爺が作業場の方へ行こうとするとアラカはソラ爺の腕を掴んで止めた

「なんじゃ、いらんのか？」

「オリジナル・・・『竜牙』も一緒に渡して。」

ソラ爺は表情一つ変えなかった

「父さん・・・もう、いいだろ。あれをリユリに返そう。」

キリヤが小さいながらソラ爺にうったえた

「分かった。返そう・・・。だがなんで分かったんじゃ？此処にある事。」

「分かんない。本人に直接聞いて。」

第三章 ？

その頃、リユリはミックとの対決の為に砂漠にいた

もちろん、此処に来るまでに人など一人もいない

「自分を不利に置くつもりか？」

「目が見えていない貴女に言われたくないです。」

ソティアは防壁の上でそのやり取りを見ていた

「前は本気でない貴女に負けてしまったので、私は貴女を本気にさせます！！」

ミックはそう言ってドラゴンになった

でも、リユリはただナイフを構えただけだった

「ミックうゝやれるよゝ」

ソティアは笑いながらミックを応援する

アラカが戻ってくるまで持ちこたえてみせる

仕掛けてくる攻撃を紙一重で避けていく

《音》を頼りに

ミツクの動きが鈍った瞬間ナイフを投げた
金属音が聞こえる

やはり、普通の武器ではダメか・・・

ドラゴンの皮膚はどんな鉱物よりもずっと固く、普通の武器では傷
一つ付けることはできない

今のリユリには反撃はできない

「こんなに科学が発展しているらしいのにいゝ刃物使っただあゝ」

「違いますよ。ソティア、彼女は機械と言うものが扱えないだけな
のですよ。そうでしょう？リユリ。」

ソティアが放った言葉にミツクが応える

「・・・五月蠅いんだよ。」

「はい・・・？」

リユリは新しいナイフを取出しながら言った

「銃と言う機械は五月蠅いんだ、周りが分からなくなるほど。その
点、コイツは私が作った物だから丁度、周りが見えなくても確実に
確認できる。」

ナイフを人差し指で弾くと周りには高く、低い音が響きわたった

「何の真似だ・・・リユリ。」

「お前が私に勝てない理由だよ。ミック。」

キレかかっているミックにリユリは冷静に応えると
薄い球体の様なモノが周りに浮いているのをリユリは感じた

「コレは・・・」

その球体はリユリの右足に当たると爆発を起こした

瞬間的に身体を動かし完全には当たらなかったもののリユリは痛み
に顔を歪ませる

嬉しそうなミックの声がリユリの耳に入った

「私も成長したんでしょう。いつの間にかこんなことが出来る様
になっていました。」

「膜の中に真空を作り出して、膜を一気に破裂させた。そうだろ。」

ミックはその言葉に笑う

「当たりです。では、死んでください！」

ミックは大量にシャボン玉を作り出しリユリの周りに浮遊させた

僅かな隙間を通り抜けリユリは避けていくが

足のケガのせいかなかなか動けず、いくつか当たってしまう

・・・っ。このままでは私が死ぬな、少し力を使うか・・・

ミックは今までより多くの玉をリユリに集中させた

「裏切り者は抹殺します！キズナさえ殺さなければ貴女は・・・！
」

リユリの方を見ると玉は彼女には当たっておらず
少し離れて浮いていた

まるで、何かに押されている様に

「何をしたんだ！！リユリ！！！！」

その光景を見ているソティアも驚きを隠せない

「すごい、初めてだよ。ミックがこんなにも怒ってる所。」

「

玉は一気に割れると

息を切らすリユリが現れた

第三章 ？

今は集中してこの球体に……

ミックが叫んでいる声や周りにある音を全て聞かないようにしてリユリは集中した

少しすると球体はいつきに爆発した

「触れてもいないのに爆発した……でもあの距離です。私の勝ち……」

人の形になりながらミックは我慢していた笑いを解き放つかのようにおもいつきり笑った

「あはは！！やっとだ！やっとお前に勝てた！」

「やっと、能力を解いたな……ミック。ゲホっ……」

砂ぼこりの中から無傷のリユリが現れる

その手には黒い刀が握られていた

「なっ……」

ミックは驚きを隠せない

「昔からだ、お前は私に質問とケンカばかりふっかけてくる。」

一瞬でミックの前に刀を構える

いつの間に！見えなかった！

ミックは膜を即座に作り後ろに下がるが上着に切れ目が入った

膜と一緒にリユリが刀で斬ったのだ

「間に合って良かったあ。」

「ギリギリだったな。アラカ。」

防壁の上でアラカとカズマは座り込んだ

「それにしてもなんでかけっこトウキョウー遅いお前があんなに早くっ……！！」

アラカはカズマの腹に思いっきりパンチした

「リユリが力くれたんだ。時間がかかるのはやばい戦いだって言ったから、少しだけリユリの力をね。」

立ち上がってリユリを見た

ミックとの混戦が続いている

「頑張つて、リユリ。」

「なんでだあー！！ミツクが押されてるうー！！！」

ソティアが飛び跳ねながらイラついていた

「ただの刀なのにいー！！」

「その悪魔。あれはただの刀じゃねーぞ！」

カズマが腹を押さえながら立ち上がり言った
防壁の手すりにもたれかかり話しを続けた

「《月光》はその辺に転がっている金属で作られている訳じゃ無いんだとさ。なあ、アラカ。」

「えっ！」

無茶ぶりしてきたカズマに少しキレる気持ちを少々押さえながら

「私は良く分かんないけど、リユリはあの刀を見て『オリハルコンで出来ている』ってソラ爺に言ってた。」

「それがどうしたのさあー！！金属は金属じゃんー！ドラゴンにはきかないよー！」

カズマがクスリと笑い戦っている方を見る

「悪魔だけど知らないことってあるんだな。オリハルコンはな、悪

魔が昔っからしっている魔法で出した『この世には存在しない』金
属なんだよ。」

ソティアだけでなくアラカも驚きを隠せなかった

「あははあゝ！なるほどねえゝ。分かったあゝありがとう。」

ソティアから殺気が放たれカズマは銃を構えながらアラカを庇う

「見てるだけってえゝ飽きちゃうよねえゝ。」

ソティアは今まで以上にニッコリ笑った

第三章 ？

リユリは刀、ミックは爪で攻防を続けているがほとんどの攻撃はリユリからのものだった

「いつまで続けるつもりだミック。」

「貴様が本気を出すまでだ！早く本来の姿になって戦え！！」

またシャボン玉を作り出してリユリを攻撃するが全てが相殺されてしまう

「釣り合わなくなるぞ、刀一本でそれほど傷ついているのに。」

リユリはそう言うが彼の怒りは頂点に達し
聞く耳をもたなかった

仕方がない《竜牙》を抜くとするか

腰に装備していた《竜牙》を抜きミックから少し距離をとった

「刀一本増えただけで何になる！！！」

ミックが攻撃を仕掛けた瞬間

頭上高くまで飛び上がるとミックの巨大な両腕を切り落とした

紫の血を浴びながらトウキョウ中に響き渡る叫びを聞く

刀に着いた血を風ぎ払い鞘に収める

「諦めがついたか？お前は私を本気にさせるほど強くないんだ。」

人型になり砂の上で腕の再生をし始めるミックを見つめながら言う

「くくっ……」

「何がおかしい？」

「貴女は何かを忘れている。」

「まさか……！？」

首に違和感を感じ始めると急に苦しくなってきた

「ソティアがぶちギレたみたいです。あの男も無能なモノですね。彼から懐かしい臭いがする。」

「それ以上言うな！」

リユリはナイフを取り出そうとしたが力が入らなかった

「クソっ……止める！」

傷だらけのカズマがソティアに叫ぶがソティアはその手を緩ますことはなかった

「彼女のキズナはあく僕のキズナの両腕を切り落としたんだ。おあいこでしょ。コレくらいしたって。」

アラカの首を絞めながら笑顔でカズマの背中を踏みつける

「君もさあゝいつになったら死んでくれるのおゝ？」

首を締める力を一気に強める

「止めて欲しいなあ、ウチらの仲間殺すの。」

「あんた、誰えゝ？」

ソティアの腕を握り口を開く

「ウチは、スズネや。」

何かの力で身体が押されソティアは吹き飛んだ

アラカの身体をスズネが受けとめる

「可愛い顔して氣い失つとるな……。カズマ大丈夫かあ？」

カズマは起き上がり鼻からでる血を拭った

「アラカよりかは無事だ。それより、リユリは……。」

「彼女なら無事やけど、まだ、あのドラゴンと対決しとる。」

リユリ達の方を少し見るとアラカをカズマに渡した

「ちよっ・・・」

「まだ終わつとらんよ。はよ病院連れてき。」

カズマは頷き走っていった

「スズネえゝ？だったけえゝ？人間じゃないねえゝ」

「せやけど、なんか悪い事でもあるんか？人間の味方したって悪ないやろ。」

ソティアの言葉に笑って返した

「帰ったらあゝ王様に言い付けちやおうゝ」

すると彼は防壁の中に消えていく

「ウチは都合のええ相手に当たったらしいなあ。」

背後にソティアが現れスズネに殴りかかった

「！？」

しかし、その拳はスズネの身体をそれていた

「残念。」

ソティアの腕を握り動けなくすると腹を思いつきり殴った

「あんたらはトウキョウからは出させへんよ。」

気を失ったソティアはその場に倒れると直ぐにマーマルが現れ彼を受けとめた

ふらついたスズネは防壁の手すりにつかまりため息をつく

「久しぶりに力を使ったからやるかな、めっさ疲れたあー。来てくれて助かったわマーマル。」

「むちゃしすぎよ。」

「むちゃしとるんはウチだけちゃうで。あっちの方が力解放したん久しぶりやろうし。なあ！リユリ！！」

遠くでミツクを担ぎ上げ

こちらに向かうリユリに呼び掛けた

「お前の事など知るか。」

第三章 ？

ミツクの気配が消えた？

廊下を歩く燕尾服を着た長髪の男はその足を止めて外の方をみた

まるで我が子を心配する様に

「どうかしましたか？アオガさん。珍しく外を見ているなんて。」

「レイア・・・ミツクの気配が切れたように感じてね。私は君の様に遠くの状況は分からないから心配で・・・」

レイアと呼ばれた白髪の女性は耳を澄ますようにして少し笑った

「心配いりません。彼らはよくやっていますよ。」

「君が言うなら安心したよ。人間達に我々がやられる事は無いからね。」

『誤魔化してくれたのか、ありがとう。』

『私にはそれくらいしか出来ません。貴女も良く頑張りましたね、

リユリ。』

姿無き声と会話をするリユリはあの日から丸一日ずっと寝続けているアラカの隣に座っていた

『私は何もしていないよ、アラカが頑張ったんだ。』

『さすがあの人の娘さんですね。キズナになった初日にリンクを使うなんて、貴女が教えてもないのに。』

『もしかしたら・・・アイツがアラカを護っているのかもな・・・』

『・・・そうですね。』

扉の音が聞こえてリユリは立ち上がった

「どう？アラカは。」

マーマルだ

手には袋を持っている

「まだ寝たままだ。いつ起きるのか私にも予想できん・・・」

「そう。私のわがままなキズナが呼んでるから直ぐに行くけど・・・」

「

そう言ってマーマルは袋からパンを取出しリユリに投げた

「差し入れよ。貴女、ずっと何も食べてないでしょ？」

「すまん。」

リユリはパンを受け取り、口をつけた

「ふふ・・・ヤッパリお腹空いてたのね。」

リユリはマーマルを睨むがそれを無視して彼女は部屋を出ようとすると
思い出した様にリユリに言った

「私もそうだったけど、ドラゴンの事かなり説明しなきゃいけないわよ。」

「・・・・。」

リユリは何も言わずに窓の外を見た

早朝だからか朝焼けで赤く染まる空が一面に広がっている

私が歩んでいる道はお前が望んだ道か？ソーマ・・・

そのまま、うずくまり

自分の身体をギュッと抱いた

「大丈夫、俺はいつも傍にいる・・・。」

「そのセリフ・・・ヤッパリ、あのリユリなのね貴女は・・・。」

ふと声の方を見ると扉の前にアラカの母親が立っていた

母親はベッドの横にある椅子に腰を下ろして寝ているアラカの顔を

そつと撫でた

「セリフ・・・？何のことだ？」

まるで、何もしていなかった様にリユリは言った

「なんでもないわ。」

「十年前と同じ顔をしていたら気付くだろうな・・・」

リユリはうずくまったまま会話を続けた

「でも、それは彼が望んだ事なんですよ？『貴女にはそのままいて欲しい』って」

「『家族を頼む』とも言っていた。死ぬ間に・・・」

「だから此処に戻ったのね。」

リユリは視線をそむける

「次のキズナはアラカだった。これは定めなんだ、許して欲しい。自分でも決められないんだよ。ユリカ・・・」

ユリカは涙を浮かべながらうずくまるリユリを抱き締めた

「！？」

「良いのよ。むしろ、貴女が来てくれて良かった。貴女がアラカのキズナになってくれて・・・」

少しの間、リユリは肩を震わせた

しばらくすると母親は部屋を後にした
疲れていたのかリユリがそのまま眠りに着いたからだ

「リユリ、リユリ起きて。」

そつと目を開けるとアラカが微笑む姿が見えた

外を見るともう昼だ

「泣いてたの？ひどい顔してるよ。」

頬がかすかに濡れているのが分かると眠りに落ちる前の事を思い出
しリユリは顔を赤くした

この歳になつてまた泣いたのか・・・

涙を拭い大きく息を吸った

「気のせいだ。アラカは大丈夫なのか？」

「私は大丈夫。元氣モリモリって感じ！」

そう言ってガッツポーズを見せるとリユリは少し笑った

「ねえ。」

「なんだ？」

リユリをまじまじと見てアラカは呟いた

「本当にドラゴンなの？人みたい。」

リユリはその言葉に目を丸くすると、なぜかマーマルの言葉が頭をよぎった

「はぁ……。人と共に生きる為に人型になっているだけだよ。その証拠に」

机の上にある《月光》を手にとると自分の手のひらにグッと押しつけた

そこからは紫色の血がこぼれ落ちる

「血は人間の赤でも悪魔の黒でもない、それにこの血は万病の薬にもなる。」

すぐに、その傷は消え元に戻った

「それに回復力も人以上だ。納得したか？」

「うん、と……とりあえず。じゃあさ、リユリは火とか吹くの？映画みたいに」

リユリはため息をつき
首を横に振った

「良いか、まず、私は火は吹かない。私たちドラゴンはこの世界が自然を創る為に現れたモノなんだよ。四元素と呼ばれているモノ達が淋しくないように。」

「四元素？」

リユリは頷くと近くにあった紙の上に漢字を四つ書いた

「『空』、『火』それに『土』と『水』だ。計四人、長となるものだ。まあ、コイツらもドラゴンなんだが。」

一つ一つの漢字から枝を伸ばしていき、更に話しを続けた

「例えば、私は『音』を司るドラゴン。昨日攻めてきたミックは『膜』を司るドラゴンだ。つまり、長達が造り出した自然に有るもの。長の子供と言ったところか。」

「ふーん」と納得する様にアラカは言ったが、何かに気付く様にリユリを見た

「木とか電気は？とりあえず自然の一部じゃない？四元素だったら何になるの？」

アラカがそう言うとりユリは険しい顔をした

「ゴメン、なんか大変な事でも言った？」

「いや、なんでもない。そいつらは特別な部類に分けられている。
ドラゴンの事はいい、これから必要な事、キズナについて言っぞ。」

「はい、先生。」

アラカは笑って驚く様な顔をするリユリを見つめた。

第三章 ？

とりあえず、腹ごしらえをかねながら
食堂で話しをする事になった

いつも通りにアラカの母親であるユリカが全部大盛りで食事を出し
てくれた

「お母さん、いつもより多くない（いつも多いけど）？」

「ちょっと色んな事が吹っ切れたから、多めに作ったのかも。」

ユリカがリユリを見るがリユリは目を合わせなかった

「かもって何？なんかあったの？」

「さあーねえ。」

そう言って席を立ていった

「めんどくさいなあ。ね、リユリ。」

リユリを見ると顔を赤く染めていた

「えっ、ああ、そうだな。」

「なんか知ってるの？」

「いや・・・何も知らん。」

アラカはモヤモヤしながら話を元に戻した

「そもそも《キズナ》って何？友達の絆みたいなのは違うの？」

「違う。」

食べ物を口に運びながらリユリは速答した

「人が思っている《絆》と私たちが言う《キズナ》は全く違うものだ。」

「昨日はなんかよく分からないけど、カズマが言ってたよね。リスクがあるって。」

食べる手を止めアラカを見るリユリの顔は真剣になる。

「だいたい聞いたから、そこは分かるんだ。でも・・・なんでキズナを守るの？自分たちも死んじゃうから？」

アラカは少しうつむいて言った

「そう思って助けるやつも居るかもしれない。でも私はそうは思っていない。自分のキズナに叫びが聞こえてもキズナ・・・大切な者には自らの身体が死のうが生きていてほしいんだ。」

その言葉を聞いたアラカは涙目になりながらリユリを睨み付け両手で音が出るほど彼女の顔をはさんだ

リユリの肌はやはり氷の様に冷たい

「こんなに冷たいからって言葉まで冷たくしないでよ。」

「アラカ・・・」

「一緒に生きていて死んでいったら良いじゃない。」

顔を見ると悲しい笑顔をしていた
そつとアラカの手を顔から離す

「そう思う理由を教えよう。ドラゴン死ぬが肉体だけ、その意思や記憶はそのまま転生へと使われる。だからある意味、ドラゴンは死なないし転生すると例外を除いては元のキズナのところへ行く。自らが司る自然を途絶えさせないために、自分の意思とはかんけいなくな。」

アラカは涙を拭いリユリの目をみつめる

「じゃあ、私はリユリと一緒に戦うからね。何もできないかもしれないけれど・・・」

「その気持ちだけで十分だ。それより、昼食こんなに残してはいけないよアラカ」

いつの間にかリユリ昼食を間食していた

アラカはリユリはドラゴンだからこの量が食べれるのかと自己解決して

本人には聞かなかった

結局アラカはリユリの手を借りて完食した

「もうお腹一杯だよー。」

お腹をさすりながらアラカは道を歩いていく
傍らで歩くリユリは満足そうな顔をしている

「あのお母さんの勢いでいくと確実に夕食もあの量だよね・・・減
らしかないと。」

「私はもう少しあっても良かった」

リユリの言葉にアラカは足を止めた

「なんだ？どうしたその顔？」

「な・・・何でもない・・・」

「マモル！居るか！」

防壁の前まで来ると門番のマモルにリユリは呼び掛ける
すると小窓からマモルが顔を出した

「どうした？リユリ、珍しいじゃないか。いつもなら無断で昇っ
ていくのに」

いつも、無断なんだ・・・

本当にリユリがどういう性格か分からなくなってきた

リユリはそう思うアラカの目を無視してマモルとの会話を続ける

「今日は上に昇りたいんじゃない、砂漠に出たいんだ。だから門を開けてくれ」

「アラカちゃんも一緒に行くんだろ」

「大丈夫だ。私がついている。」

そう言いながら腰につける二ホン刀を触った

それを見るとマモルは防壁の中に入って行くとすぐに扉が開く

たまにリユリを迎えに来ると見ていた砂漠

でもアラカは初めてその砂漠に足を踏み入れた

少し怖い

「行くぞ、離れるな」

「うん」

リユリの姿を見失わないように感覚を狭くして歩いた
生き物があるかどうか分からない砂漠を進む

トウキョウが分からなくなるほど遠くに来るとリユリが足を止めた

「ここまで来たら良いだろう。アラカ」

腰の《竜牙》をベルトから外すとアラカに投げ渡した

「重っ！」

「お前が言っただろう？自分に刀を覚えてくれって、それくらい受け取れなくてどうする。」

「初めてなんだからしょうがないでしょ！・・・？」

《竜牙》の柄とところを見ると何かが彫られていた

「ソー・・・マ・・・！？これって、お父さんの・・・」

「お前に渡す。この時がくるとは思いたくなかったんだが。」

第三章 ？

リユリの笑顔はいつもより悲しそうな顔をしながら話してくれた
ドラゴンはキズナが死ぬとキズナだった人が強く思う人のキズナに
なるんだそうだ

それで、リユリは偶然なのかずっと私の家系の誰かのキズナになっ
ていて

《竜牙》はそのなかで一番仲が良かった私の父が使っていた物なん
だそうだ

「お父さんが私を強く思ったのね。」

「ああ。だから私はお前の前に立っている。」

リユリはそう言うと《月光》から刀を抜き鞘を握った

「さて、お前は父を越えられるかこの目で確かめてやろう。アラカ、
お前は真剣で来い。」

「でも・・・分かった」

ふらつきながらも鞘から刀を抜き、目を閉じるリユリに斬りかかる。
直ぐに払われ砂の上に倒れる

「いくらでもかかってこい、私を今の場から動かせ。」

「分かった!」

何回も何回も繰り返されるとリユリは目を開き少しアラカが楽しめるようにした

「これ以上は力は抜かないからな。」

アラカは返事もせずリユリに斬りかかる
しかし、それはまたリユリには当たらなければ
リユリの足を動かす事も出来なかった

「リユリ！休憩しよ！さすがに無理だよ！三時間ぶっ通しは！」

倒れたリユリはタイムのマークを使いリユリに言った
それを聞いてリユリは微笑を浮かべる

「リユリ・・・？」

「まだまだだな、アラカ」

その言葉はリユリではない誰かだった
アラカは立ち上がるともう一度リユリに斬りかかった

「リユリの中から出ていつて！！！」

「！！？」

我に帰るようにリユリは刀を素手で受け止めた
驚く彼女の手から血が吹き出す

「どうした！？何があった？」

「リユリ！！ごめんなさい！手が！」

「指が一本切れたただけだ、問題ないよ。直ぐに回復する。」

すると切り落とされた親指の付け根は一瞬で再生した

アラカはほっと一安心するとさっき起こったことを説明したがリユリはそんなことを言った覚えはないと言う

「もしかして、リユリ有能力だったりするのかな？」

「それはない。今までそんなことはないし、私が司るモノではない。」

「幽霊的なものがさっき思い浮かんだ？」

その言葉で二人の間に異様な空気が流れた

「とりあえずだ。もう遅くなったことだし、帰るか。」

「そうだよ。ね。お母さんも心配するし。」

二人はさっき起こったことは無かったことにした

しかし

リユリは自分の中になにかを感じていた

第三章 ？

真つ暗な何もない空間に一人中学生くらいの少年がいた
ただただ生きるだけ、この暮らしをもう十年近くしている

そこに一人の女性が入ってきた

「まだお前のキズナの名を言わんのか？」

「それはちげーぞ。分かんねーだけだし。」

「いつまで嘘をつき続けるつもりだ？死ぬぞ。」

女がそう言つと少年は笑つた

「もう右目は見えてないし。普通の人ほどの体力しかねー。」

女はその空間を去ろうとすると少年は呟いた

「息子でもキズナが人間だつたら殺すか？」

「それは分かん、王の意思による。」

「バツカみてえー。おんなじ人類の癖にのよ。」

その言葉を聞いて女は暗い空間を後にした

少年は呟いた

「今より十年前の方が良い。」

「すいません！通してください！」

朝市で賑わう人混みの中一人の青年が走り抜けていた

「またソラ爺さんのパシリかキリヤ！」

周りの人達が色々話しかけてくる

「そんなこと無いですよ！急いでるんで、失礼します！」

そう言いながらキリヤは防壁の方へ走っていった

門の前にはリユリ達二人の姿があった

アラカは所々に絆創膏をはっている

「キリヤさんどうしたんですか？こんな朝早くに。」

「僕はあれですよ。素材探しに。父さんが先に昨日の夜行ってるんですよね。それより、お二人は？」

「私たちは稽古に行くんです。」

「でも、なんで門が開いてないんですか？」

リユリが手を差し出す

「マモルは風邪をひいて寝込んでいるんだそうだ。頭の固いやツがその代理。行きたいんだろ砂漠へ。」

「でもこの手は・・・？」

キリヤとアラカの腕を掴むとリユリは思いっきり跳んだ

「チョット！リユリ！！」

「大丈夫。ゆっくり降りる。」

そう言うときリヤがいるのにリユリは翼を広げた
フワリと砂の上に降り立つ

「チョット良いの？リユリからだよ自分の正体明かすなって言ったの！」

「いや・・・だがな・・・」

リユリに向かって叫ぶアラカをキリヤが止める

「知ってたんですよ、僕は。リユリさんがドラゴンだって事。」

アラカは驚きの表情を見せて固まった
キリヤは話を続ける

「リユリさんがソーマさんのキズナだったときその刀、《竜牙》を作ったのは僕の鍛冶士の師匠だ。」

「えっと・・・キリヤさんって何歳でしたっけ？」

「僕は二十三ですよ。だから、十年前のリユリさんにも会っていません。」

ニツコリ笑うキリヤを見てアラカは少しひいた

「キリヤ、お前急いでいたんじゃないんじゃないのか？」

「あつ！！そうでした！ありがとうございます！失礼します！」

リユリの言葉で思い出した様に砂漠の中を重い荷物を持って走っていった

「やっぱりぶつ通しはつらいよりユリ。」

「だが、かなり良くなっているぞ。四時間も耐えられる様になったじゃないか。」

真剣を肩に担ぐと倒れるアラカに手を伸ばし起こした

「そうだ、お父さんはどれくらいのペースだったの？」

その質問にリユリは少し考え始めた

「そうだな・・・歴代でいったら一番早かったな。」

「歴代ってどういう事？」

「皆、私が楽できる様になって刀を教えろっていつてくれたからな。」

だいたいのヤツには教えたんだ。昔は全く争いなんか無かったのにな。」

十年前に始まったこの戦い

いつ向こうから攻めてくるのかも分からないピリピリした今とは全く違う時代ってどんな光景がここに広がっていたんだろう？

リユリはまだその時代が戻って来ることを望んでいるんだろう

「ドラゴンてさ、他にもいるんだよね。」

「まだいる。キズナを持っている者もいれば、いない者もいる。」

「キズナがないドラゴンは探してたりしてるの？」

リユリはなにも言わなかった
なぜか遠くの方を見ている

「話は後だ。キリヤ達になにかがあつたみたいだ。」

「早く行ってあげよう！」

リユリは頷き、本来の白いドラゴンに身体を変えた

「手に乗れ。急ぐぞ。」

第三章 ？

砂漠の上空を猛スピードで飛んでいくと山のような所が見えた
その近くに人影が二つと鳥の様な生き物が数羽飛び交っている

リユリは近くにアラカを降ろした

『後は任せて、二人を避難させる。』

「分かった！」

二人の周りにいる鳥の様な生き物をリユリが腕を一振りして追い払
ってくれている隙にアラカは二人を避難させる

その生き物はどうみてもこの世の生物ではなかった
それが分かったりユリは一匹残らず始末していく

面倒な魔法もあるようだな・・・

「無事か？」

人形になり三人の所へ駆け寄る

「ソラ爺が足を怪我したみたい。」

それを聞いてリユリは上着を脱ぎソラ爺の左足を止血した

「そこまでやらんでも大丈夫じゃ・・・っ」

「無理するな、小さい傷でも死ぬことはあるんだ。それよりココから離れた方が良い。」

リユリはそう言いながらソラ爺をおぶった

「義手はどうしたんですか？キリヤさん。」

左腕の肘から下が無いことに気付きキリヤに質問した
違和感があるのかずっと腕をさすっていた

「父さんだけでも助けようと思って使ってたら壊れてとれたみたいで
す。また作りますよ。」

「それにしても、そんな残骸は無かったぞ。」

「あれ・・・そんなはずはないんですけど。」

目元まで落ちてきたバンダナをグイッと持ち上げキリヤは不思議そうにした

「まずは街に戻って二人の手当てしなきゃね。」

「リユリはあれを持っていてはくれんか。」

ソラ爺が指差す方向を見ると

ソリがあり、その上には大量の金属が積まれていた

「いける？リユリ？」

「問題ない。」

アラカとキリヤはソラ爺を支えながら歩き
リユリは人形のままソリを押した

「ギャツギャツ」

「お疲れ様。これはなんだい？」

煙と消えた鳥が持つてきた金属の塊からは人間の匂いがした

「人間臭いけど、懐かしい香りもするな……。もし、あの人だったら？王に知らせないと。」

不気味な笑顔を浮かべ悪魔は王のいる部屋へと向かった

「ワタクシ、技術部で開発をしているモルガンと申します。」

「私に何のようだ？」

金属の塊を取り出すと自分の前に置き話を続けた

「ワタクシの魔法で発生させた鳥に金属を取らせにやったところ、使用済みの金属を奪ってまいりました。すると、そこからワタクシの知人の匂いがしたのです。今、とある所にいらっしゃるといいう石のドラゴンの元キズナの匂いが。」

王は椅子から立ち上がった

「あやつのキズナが人間だと・・・アーチを此処へ呼べ。」

近くにいた者にそう告げると、すぐに走っていった

「モルガンだったな、お前はアーチと共にトウキョウへ。」

「おおせのままに。」

？

翌日

キリヤのもの凄い願いで襲われた現場に戻った

安全の為にアラカのたつての希望でリユリはキリヤについていく事になった

「ごめんなさい。」

「なぜ謝る？」

砂漠の砂を二人でかき分けながらキリヤがリユリに謝った

「こんな事を手伝わせてしまって・・・。」

リユリは鼻で笑った

「いいさ、私のせいだしなお前がそうだったのも。」

「そんなこと言わないでくださいよ。リユリさんがこの腕を切ってくれなかったら、僕の命は無かった。」

二年前

リユリが八年ぶりにトウキョウに帰ってきた血塗られた日

人間と思い込んでいた悪魔から必死に逃げていたが
キリヤは追いつめられた

「魔法をかける前に私の能力を教えて上げるよ、弱っちいキリヤくん。」

「来るな……」

「私の力はね。」

いきなりその悪魔に左手を握られて
ひどい痛みがキリヤを襲った

「触ったものを少しずつ確実に私の忠実な屍鬼ゲールになるのよ。素敵でしよう？」

「離せ!!」

見た目はそんなに変わらないが少しずつ自分の腕が違う何かになっていくのを感じた

その時だった頭上から黒くにじんだ白いマントに身を包み白い刀を携えたりユリが舞い降りた

「あんた誰よ？」

浸食されていくキリヤの腕を肘の少し上で切り落とし

キリヤの目の前にいた悪魔を斬った

「……リユリ……さん？」

帰り血を浴びて真っ黒になったリユリがこっちを見る

「キリヤ。止血しながら病院へ行け。」

その言葉を残しリユリはまた消えていった

「ちゃんとギリギリのところを切ってくれたんですね。感謝します。」

「あつたぞ、義手。かなり深いところまで埋まっていたらしい。」

義手につく砂を払いキリヤに渡した

「ありがとうございます。作り直さなくつてすむ。」

「もしかしてそれは、あの人が作ったものか？」

義手についているマークのようなものを見つけたリユリは目を丸くして言った

「ええ、師匠が作ったものを父さんが改良して義手にしたんです。」

キリヤが義手についた砂をはらっているのを見てリユリは微笑する

「義手も見つかったことだ、帰る・・・？」

言いかけた言葉を詰まらし、リユリは遠くの方を見つめた

「何かありましたか？」

「敬語、もうそろそろ止める。あそこにドラゴンがいる・・・いるはずは無いのに。」

「とりあえず行きませんか？」

「様子がおかしい・・・今すぐ行こう。敬語止めるよ。」

二人は走ってその場所へ向かうと

綺麗な栗色の前髪を左頬のあたりに三つ編みにした少年が砂の上に倒れた

「この子は・・・？」

「衰弱しているな。こいつはウーロ、土ノ民、石を司るドラゴンだ。」

リユリは携帯を取りだしマーマルに連絡を取った

「ウーロが外で倒れている。・・・そんなこと知るか。誰にも気づかれずにトウキョウへ入れたい・・・？」

ズボンの先を引っ張られる感覚がし下を見る

「・・・おい！リユリ！！・・・オレは衰弱なんて！！ふぎゅう・・・」

「お前、癖が直ってない。」

そう言ってリユリは足でウーロの頭を踏みつけると何もなかったようにマーマルとの電話を続けた

？

「落ち着きなさい！ウーロ！この人達は敵じゃないわ！」

ロートの医務室に入れられたウーロは人間達を前に暴れまくっていた

「こんなとこ居てられつかよ！オレは帰る！」

「待ちなさい！」

「はな・・・ギュッ！」

するとまたリユリがウーロの頭を踏みつけた

リユリの後ろにはアラカの姿がある

「大人しくしてろ。回復力も低下しているんだろっ。」

「だからオレは・・・フギユウ！」

「少し黙れ、手錠を外してやる。」

大きく息を吸い歌うように口を開ける
しかし

そこから音は出ていなかった

すると、ウーロの腕につけられていた手錠が細かく震えだし一瞬で
弾けた

「姉さんが作った手錠を・・・一瞬で？」

驚くようにリユリを見上げるとウーロは身体の力を抜いた

「同調さえすればだいたいのモノは壊れる。」

そう言っ脚をウーロの頭からのけた

「しっかりと治療を受けろ、ウーロ。普通の人間程度の身体になっているのだろう？」

「そんなことねーし！てか、お前こそトウキョウなんか居て良いのかよ。」

「大丈夫だ。定期的に帰っているよ。アイツのいる街にな。」

震えるリユリの力強く握った手からは血が滲んでいた

「リユリ？手から血が。」

アラカが言葉をかけるとリユリは我に返ったように拳を緩めた

「その女、お前のキズナか？」

ウーロは膝をはらいながら立ち上がる

「なぜ分かる。」

「ソーマにそっくりじゃねーか。誰にだって分かるさ。」

「早くお前は自分のキズナを探し出せ。死にたくなければな。」

背の低いウーロをマーマルがひょいっと持ち上げベッドに乗せた

「この前のリユリ以上じゃない。目も見えてない見たいね。」

点滴をウーロの腕に刺しながらマーマルが言う

「片目だけだし！痛いっつの、下手くそ！」

「五月蠅いわね。速くキズナと結びなさいよ、今の自我を失っちゃうんだから。」

マーマルがその言葉をはくと五月蠅かったウーロは黙った

するとリユリの服をアラカが引っ張る

「どうした？」

「自我を失うってどう言うこと？」

「ああ、私達は世界と人類を繋ぐ為に作られた存在だ。キズナと結ばなければ本来、怪我をしても瞬時に回復したり病気などはしないが、あまりに結ぶ期間が長くなると人類を敵にまわしたと見なして世界が私達からそういった力を奪い、新しい自我と入れ替え・・・」

リユリは口を閉じ上の方を気にし始める

「どうしたの？」

「・・・コイツは。すまない、話は後だ。昨日の鳥が来ている。」

「私も行くよ。」

力強くアラカが言うとりユリが笑って出口に向かった
その後をアラカは小走りについていった

入れ替わるようにキリヤが部屋に入ってくる
今日は休みなのか作業服ではなく私服だ

珍しいのかマーマルは手を止めた

「おはようございます。」

「おはよう。どうしたの？珍しい。」

「ウーロさんかなり衰弱されていたので、栄養でもと。」

「美味しそうな果物。！？・・・義手直ったのね！」

左手に手袋をしているのを見てマーマルが言うとキリヤが袖をまくる

銀色の義手が姿を現した

「前の義手が見つかったので。破損を直して、磨いただけですけどね。」

笑いながらキリヤは言った

「けっこう自然なヤツかと思ったが、サイボーグかよ。って！なにすんだ！」

マーマルが黙ってウーロの頭を殴り睨み付ける

ウーロも負けじとマーマルを睨むがキリヤが二人をなだめる

「良いですよ、言われなれてますから。気にしないで。」

「じゃあ、お詫びに。この子をキリヤの家に泊まらせてくれない？」

マーマルの爆弾発言にウーロは固まった

「別に構いませんけど？」

「良かった！じゃあヨロシクね！」

「勝手に決めんじゃねー！！」

リユリが感じとった昨日の鳥の気配はトウキョウの中ではなく砂漠のど真ん中だった

ドラゴンになったリユリは背にリユリを乗せていく

「実戦だね・・・」

『相手の出方を見れば良い。私の攻撃を避ける様にな。』

飛び続けていると黒い塊が空に浮いている

昨日の鳥だ

『耳をふさげアラカ』

そう言われたアラカは力強く自分の耳をふさいだ

リユリは口を大きく開け驚くほどの爆音を黒い塊に向かい放った

砂漠の上に降り立つとアラカは鳥達が落ちた方向を見たが黒い塊は白い砂漠の上には無かった

「これって悪魔の魔法なの？」

リユリはうなずいた

『命のないカスだが、それを作る魔法だ。前の蟲もそうだった。』

「それにしても、さっきの凄かった。雷が落ちる音は越えてたね。」

「あれ以上出すと、ヤツラにもバレるし、トウキョウに迷惑がかかる・・・」

ふと前髪で隠れる右目を触る

「まだ、アイツの力にまで達していない。」

「リユリ？」

リユリはアラカから《月光》を受け取り鞘から抜き取った

「一つ言っておく。相手が悪魔だろうと躊躇するんじゃないぞ。」

「分かった。」

《竜牙》を鞘から抜くとアラカはそつと構えた

？

ウーロはマーマルの強制的な誘いでキリヤの所で一泊した

何だかんだで入院中のソラ爺の所へ行き

ウーロの事を紹介すると「ワシが退院するまで店は開けんでいい、トウキョウを案内してやれ。」と言われたのでウーロを案内するこ
とにした

「おう！キリヤ、爺さん元気かい？」

「お陰さまで。まだ動けないんですけどね。」

至るところでキリヤは街の人に同じ内容で声をかけられ
同じ内容で答えていった

ウーロは周りを警戒しながらキリヤの背後を歩く

二人は一息つくためにベンチに座った

「そんなに警戒しなくて良いんじゃないかな？」

ピリピリとした空気をかもしだすウーロに飴を差し出し笑う

「なんだよ！」

「なにも食べていないんだろう？これしか持ち合わせないけれど、
あげるよ。」

「……………いらねーよ。」

そう言いながら飴を受け取り口のなかに放り込んだ
その様子を見てキリヤは微笑み空を見上げた

真っ青な空が広がり、雲一つない

「お前・・・リユリの正体知ってんのか？」

「キリヤで良いよ。知ってる、二年前には助けられたし、ずっと前にはもう出会ってる。」

「ふーん」

その後二人はもう一度街に繰り出し
キリヤはウーロにトウキョウを案内した

「欲しい物とかあったら言って良いんだよ。それなりにはお金持ってるから。」

「べつつつ別に欲しいもんとかねーし！！」

ウーロはそう言いつつも果物屋のリンゴを見つめる

「素直になればいいのに」と思ったがキリヤは口には出さなかった
何も言わないままキリヤはこっそりとリンゴを買ってポケットに忍ばせた

「やはり貴方でしたか・・・懐かしい臭いは・・・」

通り際に男がキリヤに眩き
キリヤは身体の動きを止めた

「覚えていませんか？」

「覚えてますよ・・・悪魔の貴方がなんで？」

義手をきしませ攻撃の準備をし始める

「トウキヨウを潰すためですよ。でも、戦うのは私ではありませんよ？キリヤ。」

ポケットに忍ばせたリンゴがウーロの所に転がっていき
踏み潰された

「ウーロ・・・君？」

ウーロの周りには石の破片が浮き上がっていた

「死んでくれ・・・」

とっさにキリヤは裏路地へと走って行く
リユリほど足は速くないが、普通の人間よりかは早かった

「このまま追いかけて半殺しといて、アーチ君」

「分かつ・・・てる・・・」

苦しそうにウーロが答えキリヤの後を追った

「あの人の弟子は一人で十分だよ。」

鳥をトウキョウまで寄せ付けないようにリユリとアラカは必死になつていた

どれ程切り裂き、消したとしても
何処からともなく大量の鳥が襲ってくる

「どうしたらいいの？きりがないよ！」

「五月蠅すぎてあの鳥どもを出す悪魔の場所が特定できない、手を緩めることも・・・無理だ！」

リユリはナイフも使いアラカへの負担を和らげながら《月光》を振った

その後もひたすら鳥達を切り刻んでいくと何も言わずにリユリはドラゴンの姿になりアラカに覆い被さった

「どうしたの？」

『私じゃなかったら失明していたぞ・・・マーマル。』

翼を押し退け外を見ると

鳥は消え去り、増えることも無かった

マーマルとスズネが目の前に立っている

「アラカちゃんとは始めましてやんな？」

「えつと・・・」

動きやすく加工された着物を纏うスズネを見て固まった

「ウチはロートの指揮官させてもらつとるスズネ。今後ともよろしく。」

『何故ここが分かった・・・？』

ドラゴンの姿のままリユリがマーマルに問い詰める

「牙を剥き出さないでよね。トウキョウの周りには隠しカメラがあるの、それで分かったってわけ。」

「お前が人に及ぼす力の事を忘れるな。・・・！？」

リユリは耳をすます仕草をした

「リユリ、どうしたの？」

指を口元へもっていつく

「静かにしてくれ」

そう言ったりユリの顔がすこし青ざめた

「先に戻る。」

「なにかあったんでしょ、私も行くわ。」

マーマルが一步前に出てリユリと見あった

「スズネ、アラカを頼む。」

「任しときい！」

マーマルとリユリは一瞬にして消え去り
砂漠にはアラカとスズネしかいなかった

「もしかしてですけど・・・マーマルさんって・・・」

恐る恐るアラカはスズネに聞いた
スズネはニコツと笑う

「気づいと思うった。そうやで、ウチのキズナ、火の民 光の
ドラゴンや。」

「マジですか？」

「大マジや。」

？

全身に細かい切り傷を作り

キリヤは人気が一つも無い路地裏にいた

その前には目から涙を流すウーロの姿がある

「モルガンさん・・・貴方は何がしたいんです・・・。彼は僕たちには関係無いでしょう・・・。」

頭上を見上げキリヤは言った

眼鏡を中指で上げ、不気味な笑みをモルガンは浮かべる

「君を潰してから、この街をと思ってね。氣にくわないんだよ・・・兄弟子である私が《特別》をもらえなかった事が。その腕もね！」

モルガンがそう叫ぶと合図に答えるかのようにキリヤの左肩に鋭い石の破片が突き刺さる

そして、赤い血が吹き出すと同時にガシャンという音を出しながら左腕が完全にキリヤから放れた

「キ・・・リヤ・・・。」

「・・・っ！！君は悪くないよ・・・ウーロ。」

右手で傷口きつく押さえて止血をしようとするが赤い血は自分の中から出ていく

「クハハっ！傑作じゃないですか！死ぬ前に教えてください、《特

別』を・・・オリハルコンの精製方法を！」

モルガンはビルから飛び降りキリヤの目の前に立った

「嫌です……。師匠との約束……ですから！」

「困るんですね……」

切り落とされた義手を拾い上げ

まだついていたキリヤの腕を義手から完全に放した

「確かにあの人が作ったモノは性能も、形も良い……それを私たちは受け継いでいる。ただ、脆いんだ！」

モルガンは義手をキリヤの目の前で握りつぶした

破片は飛び散りキリヤとモルガンにあたり傷を作った

「モルガンさん……！！！！」

飛びかかろうとしたとき

下から飛び出した石がキリヤの額にあてるターバンを切り裂いた

そのままキリヤは倒れる

「もう、出血が多すぎてうまく動けないのではありませんか？早く……」

その時モルガンは動きを止めた

「アーチさん、気づかれた様なので退散しましょうか。この分だと助かりません。」

「わか・・・た・・・」

「生きていたら、またお伺いいたしますよ、キリヤ君」

目の前から黒い影が消えていき白い影だけが残った

最後の力を振り絞り立ち上がって白い影に近づいていった

「ウーロ・・・ごめんな・・・さい。巻き込んで・・・しまつて・・・」

「何・・・つてんだよ！死ぬなよ！」

血で真っ赤に染まった右手を伸ばしてソツと泣きじゃくるウーロの頬を触れニコツと笑う

「やれば・・・素直に・・・」

キリヤはウーロの方へ倒れ、額がウーロの額に当たった

すると、ウーロが叫ぶと同時に周りは黒い光りに包まれた

「なにが起こっているの！！」

「キリヤ！！ウーロ！」

リユリ達が駆けつけるとその光りは止み

傷だらけのキリヤを抱き抱えるウーロの姿があった

「・・・マーマル。コイツを頼む。」

「これって・・・」

キリヤに近づいたマーマルは額をみて驚いた

ターバンに隠れて気づかなかったが

キリヤの額にはウーロと同じ黒い刺青のようなモノがあった

「何処へ行く。」

「砂漠だっつーの。キリヤを傷つけたやつ、同じくらい痛め付けねーと氣にくわねー!」

「場所は分かってるのか?」

怒りを爆発させるウーロをひき止めた

「石が教えてくれるし。」

「ふっ・・・。この距離、あの速さ。復活したお前でも追いつけるわけがない。送ってやる。」

モルガンが精製した巨大な鳥の上に乗る砂漠の上空を二人は逃走し

ていた

「任務はどうするきでいる？」

「大丈夫。今のは下見みたいなものですから。」

アーチの質問にモルガンは軽く答えた

「それにしても、キリヤのあの思いはなんなんだ！頭にきますね・・・。まあ、知る方法はまだある。」

「それにしても、あの土ノ民はどうするつもりだ？王に知れたら。」

「ある程度の距離まで行けばそこで一泊しましょう。また明日攻撃を」

『逃がさないつつーの！！』

その声と共に砂の波がモルガン達を襲った

砂漠の真ん中に落ちると咳き込みむ

五、六メートル離れた所にウーロが立っていた
その眉間にはシワがよっている

「ワザワザ戻って来てくれたのか？ウーロさん？」

「そんな訳ねーだろ。オレのキズナに大きな傷を負わせたんだ。」

ウーロから放たれる殺気は立っているのがやっとなほど強力なものだった

？

「久しぶりかもしれないな、ウーロの悪いクセがでていないのは――
誰にも気づかれない雲の上を飛びユリは様子を見ていた

ウーロの悪いクセ

思っていることを言葉で逆にして言ってしまうこと

本人は全くと言っていいほど気づいていない

「もう一度操ってやるよ。」

先陣をきったのはアーチだった
手をウーロの方へ向ける

「!？」

「どうした？」

モルガンは冷や汗をかくアーチに言った

「接続できない。」

ウーロの口元が笑うと砂がアーチとモルガンに絡み付いた

「キズナを持ったドラゴンにはそう言う魔法はきかないって母さんに教わらなかったか？」

「絆あ？なんだよそりゃあ！そんなんはなっ！！」

キレたウーロの拳がアーチの顔面にクリーンヒットし
アーチは気絶した

それを間近で見たにも関わらず、モルガンは冷静な顔をしている

「普通びびんだろ？こういうの見たら。」

「別に。彼とは今日知り合ったばかりです。貴方と同じでね！」

モルガンの影の中からあの黒い鳥が大量に発生し始めた
思わず、一歩下がってしまったウーロはその光景を眺めた

「私は戦えないので、この子達が相手です。」

「アハハっ！！面白いじゃねーか！そうゆうのもあんのか。それじゃあ」

ウーロは地面に這いつくばると足のない鎧兜を纏ったようなドラゴンとなった

『コツチのがやりやすい！』

そう言って大きく吠えたと巨大化した腕で大きく砂を叩くと空中へと身体を浮かせた

そして、身体を丸め鋭い背鰭をつきだした

『一発で貴様を殺す！！』

回転しながらモルガンの頭上へ落下する

鳥たちがそれを止めようとするがウーロの身体に当たり砕けちっていく

落下するスピードは落ちる事は無かった

ーダメだ！やめろー！

ウーロの頭の中にその言葉が響き身体を人形に戻してモルガンの前に着地し

モルガンの足に絡み付く砂は砂漠へと戻っていく

「私を殺すつもりじゃなかったのですか？」

ウーロは齒をきしませ冷や汗をかくモルガンを睨んだ

「帰ればいいじゃねーか。礼なら、キリヤに言えよ。」

ウーロはそう言って後ろをむき歩いて行った

「キリヤに伝えてください。今回は無かったことにして上にも報告しないが、次会ったときは容赦はしないって。」

「そのときは本気でオレがアイツを守ってやる。」

その言葉を聞くとモルガンは鳥と共に消えていった

『なぜ泣いている？』

迎えにきたリユリが空から舞い降りウーロに質問をした

「知るかよっ！・・・でも、人間ってアイツらとは違って・・・優しいな。」

『そうだな、キリヤに関しては人一倍だ。帰るぞ、キズナが待っている。』

トウキョウに戻るとすぐにキリヤの所へ走っていった
病室に入るとまだキリヤは眠っていた
左腕があつた部分には何重にも包帯が巻かれている

「あの声はなんだったんだ・・・？」

「土ノ民の力はスゴいな。」

扉にもたれかかるリユリはボソッと呟いた

「珍しいじゃん、お前が、空ノ民がオレらを誉めるなんて。」

「うらやましいだけだ。人の傷を癒すことができるその血が。」

「病人や死人には使えねーんだっつーの。」

何も言わずにリユリは外へと出ていった

それを確認するとキリヤの眠るベッドの足下に腰をおろし
そつと片手でキリヤが触れた頬を撫でるとザラつとしたキリヤの乾いた血液があつた

「温かったな・・・コイツの手」

「ウーロ・・・？」

目を覚ましたキリヤの声が優しく耳に入ってくる

「キリヤ・・・左腕、ごめんな。オレ・・・オレがお前の左腕の
変わりに！」

その言葉を聞いて一瞬、驚きの表情を見せたが
少し微笑み身体をベットから起こした

「じゃあ、ウーロの右目に、僕で良ければ。」

ニツコリと笑うキリヤの瞳は真っ直ぐウーロへ向けられていた
ついついウーロは顔を赤らめ目をそむけた

「バツカじゃねーの！！」

「いたって本気だよ。そうだ、ボクの上着の左ポケットの中にある
のあげるよ。」

クローゼットの中から昼に着ていた上着をとりだし左ポケットに手
を突っ込むと真っ赤なリンゴが入っていた

匂いがかがなくても、鼻の中に甘い香りが伝わってきた

「実はあの時もうつひとつ買ってたんだ。欲しかったんだろ？」

ずっと我慢していたのを解放させるようにキリヤに飛び付いて離れなかった

「!?!?!? ウーロ?」

ウーロの身体は細かく震えている
その様子を見て微笑むと残った右腕でそつと頭をなでた

「明日からよろしくね。」

？

「リリーユリっ！御飯だよー！・・・って、あれ？」

アラカは部屋の扉を思いっきり開けて入ったが
そこにはリユリだけでなくにもなかった

「どこ行っただろう？帰ってきてないのかな？」

しぶしぶアラカは部屋を後にした

ウーロに負け、倒れていたアーチはその夜に目を覚ました

「くそっ！ゲホ！・・・なんでこんなことに。」

口の中に入った砂を吐き出し立ち上がる

周りにはもう暗く、昼間よりも冷え切っていた
そこに白いマントを被った女が立っていた

「お前は誰だ？」

「お前がアーチだな？」

マントのフードを取ると銀色の短髪をなびかせていた

「お前は・・・そうか、応援の・・・」

「何と勘違いしている？私はお前を王の命により始末してきたただだ。」

冷血なその女の目は揺らぐことなくアーチをにらみつけていた
アーチの目には涙が溜まる

「オイ、嘘だろ・・・」

「嘘ではない。任務を失敗した悪魔など用無しと言う事だろう。」

その言葉を聞いてアーチは女の必死に足元にすがりついた

「モルガンはどうした？アイツも失敗したぜ。」

「知るか、私は任務を遂行するだけだ。」

「止めてくれ！！やめっ！！」

その瞬間アーチの身体は粉々に粉碎した
返り血や肉片が女に降り注ぐ

「本当にすまない。」

女はトウキョウに背を向けると消えていった

アラカは一通りリユリが行きそうな所を探した

防壁の上、屋根の上、ソラ爺の店、広場・・・

行くところが無くなり、最後にマーマルに連絡をとりそこで初めて
キリヤが入院している事を知り

マーマルと一緒に見舞いをすることにした

「こんにちは・・・。」

キリヤは帰る準備をしているのかカッターシャツを羽織っていた
ベッドの上にはウーロが眠っている

「もしかして、ウーロがとっちゃた？」

「そんな事ないです。起こさないであげてください。」

「私、キリヤさんが髪結んでないの初めて見たかもしれないです。」

「ほんとうね。こんなに長かったんだ・・・それに綺麗」

アラカとマーマルはキリヤの赤茶の髪をじっと見つめた
自然とキリヤの顔が赤くなる

少しするとウーロがのびをして起きてきた

「デメーら、うつせーぞ。」

「あっ！おはよう。」

キリヤはそれに気がつき声をかけた

「おはようって言うか、この時間だったらこんにちはか。」

「どうでもいいし……。てか、コイツらなんでこんな所なんだ？」

「見舞いにきちやいけないっていうの？……ぷぷ」

「なんだよ！！マーマル！！！！」

マーマルはウーロの顔を見て吹き出しそうになった

「だってさ、ヒツドイ顔してるわよ！昨日、泣いた？」

図星のことを言われウーロは反撃が出来なかった
すぐに袖口で目の下をこすった

「キリヤさん、今朝リユリ来ませんでしたか？」

急にアラカがキリヤにそう言ったがキリヤは少し考え込むと直ぐに
返事を出した

「昨日の夜来てくれたけど、すぐに出て行きましたよ。見当たらないんですか？」

「そうですね。何回か頭の中で呼びかけてるんですが、返事がなくって。」

「遠くに行っているから返事ができないとかじゃないですか？」

「バツカじゃねーの？……っつて！！」

キリヤが言った一言にウーロが答えるとマーマルのゲンコツがとん

できた

「アンタねえ少しは言葉の使い方考えなさいよ。私たちが《テレパシー》といっているその力はね、どこに居たってキズナの声は届くの。でも、リユリが何も返事をしないってゆうことは彼女がどうしてもテレパシーをする事ができないって言うことね。」

テレパシーに関しての発言にアラカはその場でしゃがみこんだ

「そんな……。じゃあ、リユリは今ピンチってこと?。」

「そんなんじゃないぜ、たぶん。」

「ウーロ、君はなにか知ってるのかい?。」

キリヤはウーロの言葉を聞き逃さなかった
その瞬間、少しウーロは顔を赤くする

「あんま詳しくはしんねーけど。アイツは 掃除屋 的な事を王に
やらされているらしい。」

「掃除屋? まったく意味が分かんない。」

「お前はかなりの間あそこに行って無いもんな。」

「うっさいわね。」

「でだ。こっちに居っぱなしっていうのも怪しまれるし、人間のキズナが出来たとなったら王が殺しにくる。」

ウーロが普通に言った事にアラカとキリヤは固唾を飲んだ
その事は気にせずウーロは話を続ける

「こんなけいやあ分かるだろう？」

「同族の私でも分かりづらいわ。でも、リユリの居場所は分かった
わ。」

「ソイツの質問には答えたかな。」

ベッドの上に座り直し、あくびを一つして
四人の会話は少しの間途絶えた

まるで

嵐の前の静けさの様に・・・

？

病院を出てアラカとマーマルと別れてキリヤ達は店へと向かった

「そう言えばさ。本当に気づいてなかったのか？キズナの証の事。」

珍しくウーロが話を切り出した事に少し驚きつつもキリヤは額のタバンをグイッと上へ上げた

「うーん、そうだな……。調度、八年前にこれが出てきたんだけど、とくには気にしてなかった。仕事にも影響ないし、いつもコレしてるから。」

ニッコリとキリヤが暢気に笑うとウーロは顔を引きつらせた

読みづらい……。完璧に、コイツの思考は読みづらい

「ウーロ」

目は合わさなかったがウーロはキリヤの言葉に耳をかたむけた

「昨日キミが言った事、覚えてる？」

「覚えてる。やめろつつつてもそれだけは……」

「頼って良いかな？」

キリヤとはそんなに会って時間はたっていないなかったものの

なぜか、驚きを感じた

「なんだよ。」

ほんの少し顔を赤くした

「義手作り直したいんだけど、片腕じゃ無理だから。手伝ってもらって良いかな？」

「つんだよ！そんなぐらい、めんどくせーけど・・・やってやらあ！」

渋々そう良いながら腕の通っていない袖口をギュツと掴み
キリヤの少し後ろを歩いた

大広間の中心でリユリは一点を見つめ立っていた

その目線の先には豪華な椅子に座っている男
悪魔の王だ

王の隣に立つ家来らしき男が口を開く

「それで、始末はしてきたのだな？空ノ民、リユリよ。」

「しっくていなければ、これほど返り血は浴びていない。」

顔色一つ変えることなく

その言葉だけ残しリユリは部屋を後にしようとした

「リユリよ。」

王の低い声が彼女の足を止める

「私が憎いか？」

「王！失礼ながら・・・」

家来がそう言いかけるとリユリは振り返ることなく
王へ力強く答えた

「私は、私達は十年前にアンタに負けた。それでアンタが強い事は
重々承知している。そんな感情など抱いてなどいない。」

リユリは部屋を出ると大きくため息をついた

帰るか

「おっ！リユリじゃねーか。久しぶりだな。」

その声の主は

肌が黒く染まり、前髪をヘアピンで止めている男だった

「シュオウ、キズナの側に居なくて良いのか？」

「そういうことはお前に言われ・・・」

シュオウが言いかけるとリユリはそっと人差し指を口元に持ってい

った

廊下の奥の方から靴の音が響き渡り
アオガがこちらに向かって歩いてきた

「久しぶりに君たちが一緒に居るのを見たような気がするよ。」

「そりゃそうですよ。リユリは任務でトウキョウの近くまで行って
いたんですから。なあ？」

勝手にシュオウが話を進め

少し大きめのため息をつきリユリは軽くうなずいた

「それなら、ミツクを見なかったか？トウキョウへ行っただけなん
だが。」

「私はなにも。近くの砂漠にいただけですから。」

そう言っただけで軽く咳き込むとアオガはリユリの頭を撫でた

「ありがとう。早くキズナが見つかるといいな・・・」

「諦めてますから。」

リユリの言葉を聞いてアオガは憂いの表情を見せその場を去って
いった

ある程度アオガの姿が消えると

二人は歩き出した

「本当は嘘なんだろう？」

「何の事だ？」

「咳き込んだごとつ！！」

そう言いかけるとリユリは思いっきり後頭部を拳でなぐった
シュオウは思わずしゃがみ込む

「耳が良いのは私と母だが、人類よりも機能が長けている事を忘れるな。」

「だからって殴ることないだろう？」

？

城から離れた誰も知らない小屋

シユオウはリユリをそこへ連れてきた

「私は早くトウキョウへ戻りたいのだが？」

「まあまあ、そう言うなって。久しぶりに帰って来たんだからよ。」

ホコリっぽい空気を入れ換えようとシユオウは窓を全開にする

リユリはその光景を黙って腕をくみ、見ていた

「そこにいるのはナリヤタナか。」

「お久しぶりです。リユリさん。」

物陰から現れたのは

着物の様な白い服を着た青年だった

「どうしても直接伝えたい事があったので彼に連れてきてもらった次第です。」

「そんな事はいいいから座ってくれよ、病み上がりなんだからさ」

シユオウはあわててナリヤタナを椅子に座らせた

「前と変わらないな、キズナに甘いのは。」

「うつせーよ。」

「で？伝えたい事ってなんだ。」

さつきまでとは違う冷静な顔をしたリユリにナリヤタナは語り始めた

「昨日話し合いが開かれて、王が決定付けた事なのですが。」

「それがなぜ私がトウキョウに帰ってはいけないことと関係がある？」

「どうか冷静に聞いてください、それが・・・ソーマさんの血筋を消すと言っんです。」

「アラカをか？それなら早く・・・」

リユリがそう言っつて小屋から出ていこうとするとシュオウがそれを止めた

「お前の親からも止めろと言われているんだよ。それに、アラカちゃんだっけ？その子連れてくるヤツは元水だ。」

「アオガか・・・ヤツとはミツクの事がある。」

「なにがあつたか知らねーけど、俺らにまかせろ。」

自慢げに胸を張るシュオウを不思議そうにリユリは見つめる
ナリヤタナが自ら話したい理由がわかったようなきがした

「あの・・・ですね。」

困った様にナリヤタナが補足する

「人間が王の前に跪く前に夜の砂漠を乗り切る事は出来ないだろうと言ったので、彼もついていくんですよ。」

「保険というわけか。ナリヤタナ、お前は大丈夫なのか？一人で」

「彼がいなくても能力を使えば周りは見えます。」

安心したような顔をし壁にもたれ掛かると
小屋中に甲高い音が響きわたった

「な！なんだ！ここがバレたか？」

「すまん、私だ。」

リユリは携帯を取りだし電話に出た
相手はマーマルだ

後ろではシュオウとナリヤタナが不思議そうにその様子を見ていた

「もしもし、こっちだと出るのね。」

「当たり前だ、王の能力は知っているだろう？なにかようか？」

「なにかようか？は無いでしょう？アラカちゃんが心配しているのよ。」

「そうか、実は当分帰れそうもない。その理由を今から一度だけ言うぞ・・・」

リユリはマーマルに全て説明し始めると

彼女は真剣に相づちをしながらも黙って聞いてくれてた

「それと、このことは私たちを知っている人間のみ伝える。」

「了解。アラカちゃんにはなんて？」

「私が合図するまで知らないふりをしろと。それだけ伝えてくれ。」

「わかったわ。そうだ、そこにシュオウ居るんでしょ、替わってくれないかしら？」

それを聞くと黙ってシュオウに携帯電話を差し出した
恐る恐るシュオウはそれを受け取る

「それを耳に当てる。そしたら会話が出る。」

「お・・・おう・・・」

始めは怖々話をしていたものの

相手が姉のマーマルだったせい

会話がはずんだ様子だった

「人間はあんなものを作る様になっただけですね。」

「そうだな。アレに慣れたのは最近だ。キズナ・・・アラカのおかげでな」

そう言っているリユリの雰囲気を感じナリヤタナは少し幸せな気持ちになった

？

「そう・・・ですか、私頑張ります。」

電話で伝えられた事をアラカへ伝え
マーマルは少し不安な気持ちだった

まだ、ドラゴンの存在とキズナについて聞かされて日がたっていない
たった十五歳の少女が今
今までに想像もしていなかっただろう事に向かって歩いている

しかもたった一人の大人のわがままで

「マーマル？なんちゅう顔しとんねん。」

「えっ・・・」

スズネの一言で我に帰るとマーマルは自分の顔を何回も叩いた
まるで自分に覚悟を決めさせるように

不安がるアラカの肩にそつとスズネが手をのせた

「・・・スズネさん？」

「大丈夫、マーマルの弟もついとるし向こうにはリユリだっておる。
ウチらがしっかりサポートするで」

不安など感じさせない笑顔のスズネを見ていると

気持ち、落ち着いたのかアラカも笑顔を作った

「問題はウーロとキリヤやな。見つからんようにしてもらわんと。」

「あの二人にはまだ伝えてないからね。」

スズネとマーマルが悩んでいると
アラカが思い出したように言った

「そういえば、キリヤさんが久しぶりに大きな仕事が出来たから仕事場に籠るっていつてました。」

「ほおう、熱心やな。でもまだソラ爺さんは入院中じゃ・・・」

「ちゃんと許しをとって、ウーロさんと頑張ってるみたいですよ。」

満足感を得たようにスズネは笑ったが
となりでマーマルはなんとも言えない表情をしていた

「ど、どうしたん？そんな顔して。」

「ウーロが人の助けをするなんて・・・あり得ない・・・」

「珍しいことみたいやけど、まあ、今は明日の事だけ考えよう。」

？

ナリヤタナ達と別れると

リユリは形だけではあるが自分の部屋へと向かった

廊下ですれ違うのはもちろん悪魔ばかり

王に仕える使用人達が自分の顔を見るたびに頭をさげてくるからか
ものすごく落ち着かない

きつとそのこと以外に落ち着けないなんらかの理由はあるのだろう

当分帰ってきていないせいにか

リユリの部屋はほこり臭かった

窓を開け、夜風を部屋に入れバルコニーの縁に座って空を見る

星はトウキョウよりは輝いているし

空気も澄み切って、雑音もないが

リユリはやっぱりトウキョウのが何倍も良いと思った

「やはり・・・腐っているな、この国は・・・。」

そう呟くと背後から聞き慣れた声がした

「当たり前だ、王が腐っているからな。」

「ラル兄さん・・・いつ入って・・・。」

扉の近くに立っているのは
彼女と同じ白髪の大人数びた顔の青年

ラルだ

「バカ。お前の能力をすり抜けられるのは俺と母さんぐらいだろう？」

「確かにそうだが、なぜここに？」

「特に意味なんてないさ。ただ、久しぶりに妹を見たかっただけのさ。」

「きもちわるい」

笑って話す兄にリユリは一括を入れる

「まあまあ、いいじゃないか。それよりも明日・・・いや今日か、俺が言えるのはとにかく自分のキズナを守れ。」

「ああ、わかってる。死ぬ気で守る。」

「『死ぬ気』になるだけだぞ。本当に死ぬな、キズナは思っているより強くないんだから。」

そして、トウキョウ

夜、当日となるとスズネ達は寝ることはできなかった

もちろんアラカも

「シユオウがしっかり伝えていれば、アラカちゃんはアッチに連れてかれるだけ。」

「だけど、リユリの声は何かを隠してる感じだった。」

マーマルが言った言葉にアラカは付け足すように言った

「大丈夫や。彼女のことやしキット考えでもあんのやろ。」

笑ってスズネは言ったが直ぐに真剣な顔になるとアラカをみつめた

「どうしたんですか？」

「この事くらいは言ついてもええやろ。奴の魔法についてはほとんど分かつたらんのよ、知つとんのはほんの一握り。これだけは言つとく、目は見るな。ええな？」

「はい。」

「ほな、今は寝とき。疲れとつたら元も子もないし、お母さんにも説明しときや。」

またスズネが微笑み、少し安心したのか
ほんのりアラカに眠気がきた

「スズネさん達も寝てくださいね。」

「チャント寝るよ、今日は街とアンタを守らんな。」

ほんの少し挨拶をかわし

アラカは家に帰っていった

「本当に寝るの？無理なんじゃない？」

マーマルが資料をまとめながらスズネに言った

「ウチが行けたらええんやけどな。」

「スズネ？？？」

「ウチが行けたら、力で助けられんのかな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6289m/>

SAVE

2011年10月7日07時41分発行